馬來半島の猛獣狩

樂山著

博文館發行

251-782

馬來半島の猛獸狩

樂山著

明治
44. 6. 1
内務

はしがき

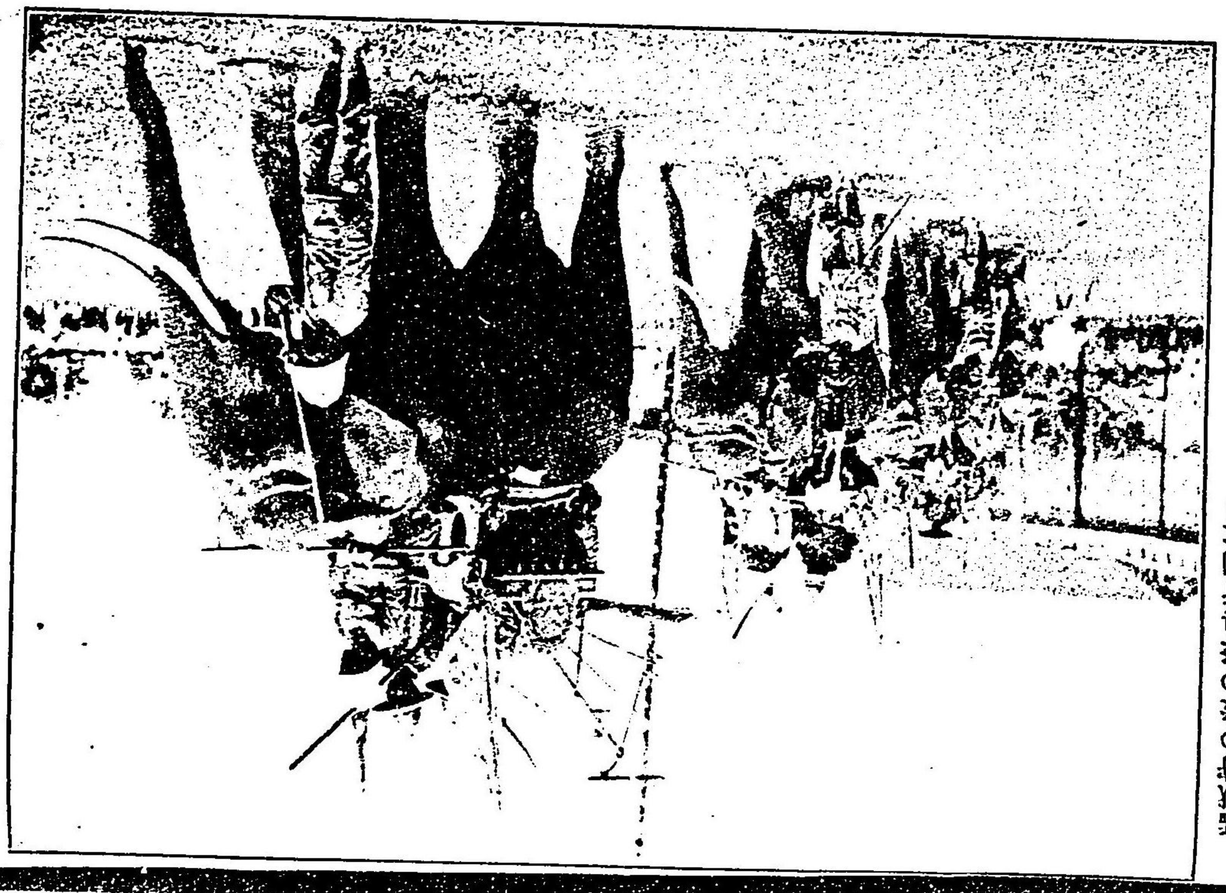
序文で候と、茲に改まつて、小理窟を涅ねる要もないが、事の始末を申さうなら、親爺の虎の子を絞らせて、朝の七時から、辨當箱下げて、學校通ひの其時分、虎毬生した先生から、虎穴に入らざれば、虎子を得ず、と妙な口調で敎はつた、夫れから以後は、虎の子と云へば、直覺的に黄金が連想された、然るに計らずも、今度虎の本場の、馬來半島に來たのであるから、大に好奇心を動かさしめた、然も遐羅では、軍隊や工場で、盛に象を使役して居る、是を思へば日本で、馬や人間が、一つの大砲に、蛛の子を散した程、かゝつて居る馬鹿〳〵しさ、野生象の五六萬もあつた

ら、日本の砲兵を、聯隊の建物ごと、戰場に運ばれるだらう、夫れに虎の子を、番犬の代りに、飼つて置いたら、盜人の用心となり、死んだら、皮は敷物にする、一舉兩得、五千萬や、一億萬の小金儲は、半年たゝぬ内さ、親の臑の味より、外に知らぬ青瓢箪を、あッと云はせて吳れんずと、出懸けた時の道中記、名づけて曰く、題の如し、出版に就て、添ふるはしがき、由來因緣、あら〳〵ざつと如件

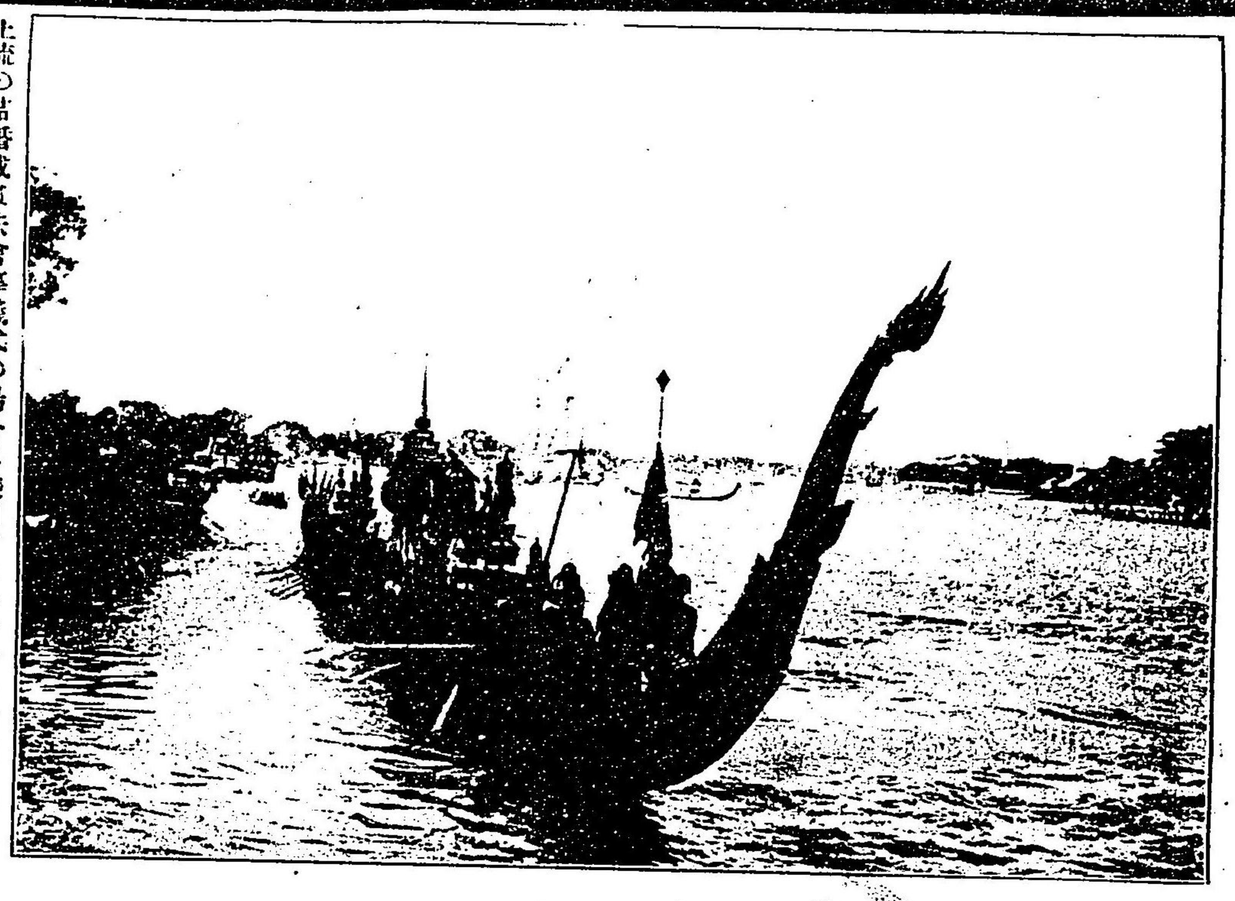
四十四年五月

在遲羅樂山

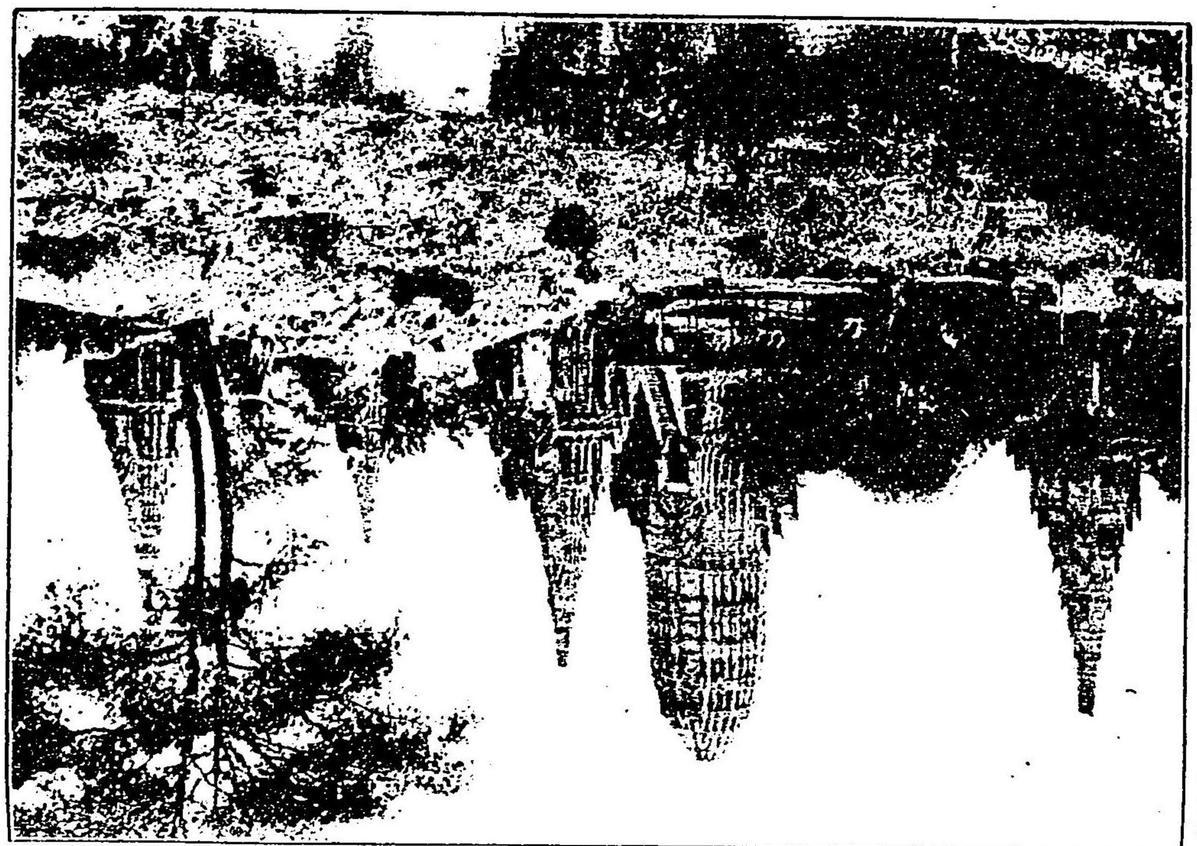
陷穽に落ちたる象を引揚げ部落近き牧場に送る途次なり遠く見ゆるは部落土民の見物なり



猛獣狩の後の祭典行列々々



上流の結婚或は法會等儀式の場合に乘用するルアヂヤンなり今花嫁を乘せてメナム河を下る處



第弁庭ヲツサヤトの遺景なり中央の大なる塔は石造にて降魔の件を安置す我國に昔で分派せし道昇も此塔に分銅せる物の一部なり

馬來半島の猛獸狩

目次

第一信　馬來半島に向ふ

一　生死を賭して出發……二
二　觀音開きから女の聲……五
三　土人部落の一夜……九
四　線路に倒れた怪獸……一七

第二信　メンロツクの水牛狩

五　突如怪獸に逐はる……三三
六　水に投じて避難す……二七
七　挑戰の合圖……三一

八 野獸と土人の格闘……三四
九 擊て！逃すな！……三八
十 初陣の功名……四〇

第三信 その後の悲劇

十一 石蓋の下は血の海……四一
十二 屍體を脊負つて歸る……四六
十三 葬式に水牛の生首……五〇
十四 土人娘の裸踊……五四

第四信 露宿して大蛇に襲はる

十五 椰子の灯皿……五九
十六 山腹の露宿……六三

十七 怖ろしい大蛇の鎌首……六七
十八 變な啼聲……七二

第五信 壯快なる高原の虎狩（上）

十九 虎狩の首途……七六
二十 雷の如き猛虎の叫び……八〇
二十一 非常報知の竹法螺……八四
二十二 象を替へて奮闘……八六
二十三 それッ……今だッ……八八

第六信 壯快なる高原の虎狩（下）

二十四 新手の豹加はる……九四
二十五 猛虎の餌……血まぶれの臟腑……九四

二十六 勢子挾み撃となる……九六
二十七 再度の銃戰……一〇〇
二十八 象に獲物を積んで歸る……一〇三
第七信 祝宴中の椿事
二十九 遙かに聞ゆる蹄の音……一〇七
三十 馬上の女……一一二
三十一 悽慘なる一夜……一一六
第八信 ナイルド大僧正と語る
三十二 繪の樣な河瀨の眺望……一二一
三十三 千年以前の名刹……一二四
三十四 命がけの坊主の濡事……一二六

三十五 破戒僧の遠留場……一二八
第九信 メナム河畔の鰐狩（上）
三十六 セイチョロッケー……一三三
三十七 先發隊の斥候……一三七
三十八 好機到來……一四一
三十九 船方の肉迫……一四六
四十 水を裂いて躍る怪魚……一五〇
四十一 荒狂ふ子鰐の最後……一五四
四十二 女鰐の味噌煮……一五六
第十信 メナム河畔の鰐狩（下）
四十三 彈丸は什麼する？……一五九

四十四 闇を犯して足場を造る……一六三
四十五 猿？人？……一六七
四十六 部署各々定まる……一七一
四十七 一命は風前の燈……一七六
四十八 血の氣の失せた蒼い顔……一七九
四十九 咽喉下五六寸の急所……一八二
五十 火箭隊の奮戰……一八六
五十一 蕃刀（ヤーインニー）で鰐の解剖……一九〇
五十二 村盡れで左樣なら……一九四

第十一信 水上街の奇遇
五十三 河の上に不思議な街……一九九
五十四 怪紳士ホールアン君……二〇三

五十五 是非一緒にお出でなさい……二〇八

第十二信 結婚式見物記
五十六 不思議な糸卷……二一二
五十七 嫁送りの炬火……二一七
五十八 チチカルの嫁御寮……二二一
五十九 竹琴の合奏……二二六

第十三信 林中の戀の神
六十 皮盜人と間違へらる……二三〇
六十一 針打ちの少女……二三三
六十二 ビルマ亡國の憂士……二三八

第十四信 最後の象狩

目次

六十三 小面憎い指揮象……二四一
六十四 凄まじい逆襲……二四六
六十五 左様なら！諸君……二五〇

終

樂山著

第一信

馬來半島に向ふ

一　生死を賭して出發す

西暦千九百九年五月六日

僕は報知新聞通信員の名によつて破天荒の冒險紀行の途に上つたのである。前途は茫々たる雑草樹林の馬來半島、人の畏れる猛獣の棲家へ、僕だからとて洒落や酔狂で突進する程な猪武者ではない。が茲に僕の大決心を促がした忌々しい動機がある。外でもない從來幾度となく送つた僕の通信は嘗て紙上にあらはれた事が莫い。此では折角海山越えてやつて來た甲斐がないので何か一つ腹癒せをと苦慮した結果、生死を賭して猛獣狩の首途を潔くした譯なのである。

出發點たる新嘉坡は既に雨期に入つて、鐵火の如き炎天の日脚は、曉霧暮雨によつて辛くも凌ぎやすきを感ずるのみ。異郷の空に雨を含んだ雲の往來は、徒らに低く垂れて、襟首に鐵槌を縛りつけられたやうな厭な天候である。

曉深く出發の準備をした。先づ縮の襯衣一枚に半ズボン、露西亞式の卷ゲートルに脚を固めヘルメット型の帽子眼深に眼鏡を光らせた漂泊の日本人は、卷蒲團、枕、畳み蚊帳、罐詰を一纒めに

して確かと背負こみ、此で宜しと路上に飛出すと、夫と見た往來の者は云合せたやうに僕を圍んで嘲笑を浴せかける。不思議な服裝をした見馴ぬ旅客は、更に左の手に鐵葉の藥罐を提げて右手には鍔を外した三尺無反の日本刀を杖ついて居るのだもの、渠等が不思議に思ふのは當然だ。笑はゞ笑へ、旅の恥は掻き捨てと云ふ諺もある。況て茫々たる旅程は人間對手の凡々たるものでは莫い。虎で御座れ、鰐魚で御座れ、獰猛な野獸怪魚を向ふに廻して格闘する鐵腸心、高が路傍の嘲笑位僕にとつては屁程にも感じないのだ。

新嘉坡を出はづれて、ポンチのやうな旅裝を洒して郊外の一路をてく〳〵と歩んで行く、草を被つた狹い路はケター、ケランタ

ー、ツリンカノの各部落を縫ふて何處までも續いてゐる。雙肩の凝りを押へ日本刀をがちやり〳〵と杖にして郊外を急ぐと、道は聽て護謨の林に消える、此の地方は本年四月邏羅から英國に割讓した處で、多くの白人は盛んに護謨の栽培に努めて居るが、我が日本の遞相後藤新平男なども以前から此地方に栽培所を設けて私かに、護謨を育てゝ居るさうな。路を覆うた護謨の葉影は、わづかに日光を篩ひ飜すのみで一歩は一歩より樹ぐれの暗に惹つけられるやうな陰鬱な精に襲はれる。

二　觀音開きから女の聲

この地方は殆んど四季を通じて樹葉の凋落せぬ熱帶である。と

云ふても容易に信じられぬやうに聞えるが、恁うして旅路を辿るにつけても此が果して地球上の一劃であらうかと惑はれる位、實際の氣候風土が異つてゐる。花は春咲くもの、木の葉は秋に散るものと決めてゐる吾々には、常に綠の色を見る熱帶の風土が甚だ不思議に眺めやられる、この半島では稀れに木の葉が凋落して佗しい夕陽の光が幹を流れるのは眞の一週間位で、木の葉が散るなど思ふてゐる間に、柔らかな若芽は再び梢を鎖して繁る。

軈て暗い護謨の林を潛りぬけると、怪しい聲が忙しく聞えて、異臭がぷんと鼻を衝く、「はてな、」と思つて立停ると右手に苫葺きの土人の家がある。元より粗末な木材を組立てたに過ぎぬ家だ。六尺餘りの床下には數頭の豚が、ぐう〳〵と鼻を鳴らして押あつ

て居る。僕も大分疲れたから一憩みして行かうと思つて、すたすたと土人の家の庭に這入つて、覺束ない土語で聲をかけた。

『御免なさい』

寂として何の返辭もない護謨やチークの葉は、家根一ぱいに繁つて濕つぽい綠が土に沁みて居る。斯くとみて床下の豚奴、怪しげな奴とでも思つたのか、穢ない鼻先を揃へて追かけて來た。こりや堪らんと逃腰を浮かす途端、荒削りの觀音開きの扉がギーと開いて『誰樣？』と女の聲が聞えた。

薄穢い床下の豚奴に逐はれて逃腰を浮かせた僕は、女の聲を賴りに物をも云はず、觀音びらきの扉に縋りついた。土人の女は怪しげな僕の旅裝に驚いたものか、衝と奥に遁げ込んで眼を光らし

てゐる。僕が怪しいもので莫いと簡略を、覺束ない土語で話すと、漸やく謎の解けたやうな顏つきで、恐る〳〵部屋に出て來た、忌忌しく豚奴は、相も變らずぐう〳〵と鼻を鳴らして、床の下を驅け廻る。

『暫らく憩ませて貰はう』と床に胡座をかいて荷物の革紐を解くと、肩が樂々する、僕は無暗と咽喉が渴いて仕方がない。早速鐵葉の大藥罐を出して水を貰つて湯を沸しに取かゝる。

ぐ、、、りと部屋を見廻すと、眞の雨露を凌ぐに足ると云ふばかりで、無雜作に切組んだ柱、梁は、各れも自然の木肌その儘で、酷く混雜な建築である。一切壁を塗らず、削り放しの板を打つけてある限りで、趣味を解さぬ土人の住居は、何等の裝飾も施してない。偶

と氣がつくと、床の隅に、お椀大の穴が切つてある。その穴の下に豚の鼻息が集まつて、ぐう〳〵と何物か待つて居るやうな氣勢だ。はてな、と暫らく考へてみて僕は堪らず噴飯して了つた。外でもないその床板の穴と云ふのが、即ち土人が居ながらにして鬱憤を晴らす大小便所であらうとは！更に床下に飼はれた豚どもは、その穴から天降る、大小便を頂戴して、腹も肥せば渴を慰す、自然の大法は恁して手數もなく、各れの廢屋にも豚の鼻息が床板を蒸しかへして居るのだ。

三　土人部落の一夜

間もなく藥罐の湯が沸いた。二三杯立つゞけに流し込んで、後

を捨てやうとすると、土人の女は慌てゝ甕を持出して、殘つた湯を吳れと云ふ。云ふが儘に分けて遣つて、荷物の裡の罐詰をあけて腹拵へをした。

親切な土人の女は其家の娘であつた。眞黑な艶のいゝ、顏の輪廓も尋常で、朱の唇に雪白の齒ならびがちらと洩れて美しい。茶の型つきパノンを腰にまいて、柱に倚つて凝と僕の擧動を見守つて居る。パノンと云ふのは、二尺巾八尺餘りの腰卷きで、布の耳を前で結んだ、餘りを左捲にまいて、股をくゞらせ脊骨の端にちやんと挾む。これが一般土人婦女子の服裝で、市に近い部落の女は、一尺巾の布で乳房を藏し、左の腋下にだらりと結さげてゐる。男子はパノンの外にサロンを用ゐるので、夫は普通の腰卷のやうな

ものだ外に又バカマと云ふ物がある。路上を行くには、燒きつける炎天の日脚をさける爲にバカマを頭に被り、草深い河流を泳ぐ時には、バカマをパノンのかはりに腰に卷く、至極簡便なものである。僕は思ふが儘に疲れを憩めて、赤銅色の娘に別れ、豚の鼻息を後にして、再び護謨林の暗い路を辿つて行つた。

第一夜はツリンカノの一部、メトラン村の長の家に泊めて貰つた豐な地味に育ぐまれた娑婆たる庭樹に、黃昏の憂を罩めて血のやうな殘照の光が流れると、次で夕の涼しさが何處ともなく浮動して來る。この地力にあつて心の落つくのはこの黃昏の一刻のみで、腦の底まで沁々と旅情を促がす——僕の泊つた家は部落での名望家だけに、尻の下を豚の鼻で突かれる事はないが、依然として

觀音開きの扉の隱には、怪しげな羽蟲が塵のやうに飛揚してゐた。

僕は荷物のなかの罐詰を、手土產として贈つた。淺い闇に燈火が灯ぼされると、驛て夕餐の報知があつた。

『お客さん』と呼ばれて夕餉の席に出て見ると、何れも空腹を抱へて待つて居た。一家六人各れも眼珠を光らかせて並んでゐるが、灯の光が屈强な裸體の胸元に映つて、僕の縮の襯衣が際立つて白い。怪しげな器の蓋をとつて眞中へ持出すと、それッと計りに誰も彼も爭つてその中から米飯を掴み出す、——眞黑な掌にうんと掴んだばら〳〵の米の飯——聞いては居たが、呆氣に取られて手を出す勇氣も莫い。

『御馳走はないがお召りなさい』

と家長はお世辭を云ひながら、掴んだ飯を拇指で、口のなかへ彈き込む、赤い唇を開いて、ばくり〳〵とせしめる手際は、到底形容しつくされぬ不思議な業である。僕が手土產に贈つた罐詰は何よりの珍味で、各も餓鬼の樣に、奪合つて手掴みで平らげる。

僕はばら〳〵の米の飯を分けて貰つて、罐詰を菜に悠くりと食事に取かゝつた。然し折角の御馳走も、肝腎の飯がばら〳〵なので、味も何もあつた物ぢや莫い。この地方の土人は、多く自ら耕作した米即ち、南京米を常食としてゐるが、炊事方が頗る異つてゐて、一旦煮上がつた上水を、こぼして了ふから、日本の飯のやうに、齒當りの宜い、柔らかなものは出來ぬ。要之ばら〳〵の乾いた飯を珍重がるのも、箸を使はぬ習慣から割出された寸法ら

しい。土人は切りと舌皷をうつて、眞黑な漬物を賞翫する。僕もつい助平根性にそゝのかされて、一片摘んで頰張つたが最後、唇が裂けたかと思はれる程ピリ、と辛い。ふう〳〵云ひながら頰を押へると、土人は一齊に手をやすめて、汗をたらして苦しんでゐる僕の顏を、怪訝さうに見つめて居る。

南蠻だ！唐辛だ！！舌が爛れて火のやうに熱い!!! 出發前に聞いて居ながら、手を出したのが一生の不覺だ。と諦らめて見ても仍且唇がびり〳〵する——土人の習慣として石臼で唐辛を碎いて、何な食物にも味をつけるのだ。背て鄕里の山峽の一室に、馬琴の弓張月を繙いた時、その一節爲朝島めぐりの條にも、島人が唐辛を重寶がる事が書てあつた。そんな儚ない繰心をも、異鄕の佗しさ

に考へて見た。

その夜は空しく明離れた。寢苦しい空氣枕に、凄まじい雨の音を聞いた。やれ〳〵降り出したなと起出して見ると、果せる哉暗雲は空を鎖して、裂けよと計り雨脚はチークの葉を叩いて居る。然し雨に降られるからと云ふて、躊躇すべき筈がない。恁う降り出したら雨具なぞは用をなさぬ。猛烈な雨、ずぶ濡れになつて前日の如く、田舍路をのそ〳〵と進んで行つた。ヘルメット帽は被つて居るが、鐵甲を被つたやうに重い。縮の襯衣は着てゐながら雨の脚は手酷く肌を撲つける。樹蔭を辿り草を分て、辛とエーリヤと云ふ部落の手前までやつて來た。

突如、ワーッと云ふ人聲が雨に隔てられて前方に聞えた。何事

か知らと思つて透してみると、一叢の樹立の蔭を、數十名の土人が走り廻つて居る。赤いパノンを捲た女や、縞のパカマを被つた男が、赤銅色の素裸で、事ありげに雨中を飛歩く、普通事で無いと思つて、僕は懸命に走り出した。

『犀を撃つた』

『汽車は怪我は無かつたか』

犀！汽車！僕の胸は躍つた。

『何處に犀が居る？』

『停車場の傍の線路に』

僕は藥罐を放り出して日本刀を提げた儘、猛雨を衝いて指さす方に、滋直に駆け出した。

四　線路に倒れた怪獸

雨に疲れてうんざりした僕の五體は、『犀を撃つた』と云ふ土人の言葉を聞くと等しく、稲妻に撲たれた如く引締つた。停車場の線路の傍と聞流しにて、猛雨を衝き、宙を飛んで一目散、數名の土人もとつ〳〵後から跟いて來る。エーリヤの部落から停車場までは約二三町、危ふく脚を取られさうな泥濘を飛越えて、辛くも構内に駆けつけた。

寂しい邊陬の停車場を中心に、茫々たる繁草樹林は涯もなき平原に長けて、二條の鐵路は長蛇の如く、蜿蜒とその裡を走つてゐる。燒木をうつた構内を離る約一丁の處に、土人の一群が押合ひ

ながら怪物を圍んで騷いでゐる。的きり其と踵を返して行つてみると、土人どもは裸體のまゝで、猛雨のなかに人垣を造つてゐた。

偶見ると、線路の上に横たはつた怪獸の屍骸。三つに割れた鐵の如き堅い蹄を反らせて、仰向けに打倒れた悽慘なる光景、一發喰つた鼻面の彈痕からは、滾々たる血潮が氣味惡く口中へ流れこんで、胸の荒毛を染た一面の唐紅、馬より巨きい黑鼠色の全身には、熱帶動物特有の粗毛が生へて、前脚の短い見るからに悚とする、獰惡な最後の相を曝してゐるばかりか、額に鋭い二本の角がにょつきと突出てゐる。有繋の猛獸も、到底人智の敵では莫い。緩んだ筋力、血を含んだ兩眼、恁うして裸體の土人に圍まれながら、最早や堅角の一突をも施すべき力が莫い――然し待てよ、この怪獸は

寫眞や繪で見た犀とは、酷てもつかない角が二本だ。已ならず象に似て、鈍な獸と思つてゐた想像に反して、頗る敏捷な體格を備へてゐる。

『これは犀？』

と土人に訊くと『スーモー〳〵』と言下に答へる。スーモーは犀の事だ。犀に違ひない、熱帶地方の動物には、屢々恁うした間違があり勝だ。僕も犀は象に似た、のそ〳〵したものとのみ思つて居たが、今目の前に實物を見るに及んで、漠たる想像は恐怖すべき實在となつて胸深く刻み付られた。

夫にしても犀は什麼して這麼停車場附近まで出て來たのであらう？、この疑問を解かんが爲に、僕は土人の群に向つて說明を求

めた。するとそのうちの一人が、當初から草叢にかくれて實見したと云ふので、詳さに其光景を話し始めた。

新嘉坡からビルマに通ずる幾千哩の鐵路は、高原を走つて、朝に、夕に、黑煙を草に敷く。その鐵路を挾んだ深林中に棲息する巨犀は、轟々たる車輛の響を聞くと同時に、蹄をあげて突進して來る。その日も丁度新嘉坡を發した列車が、黑煙を吐いて進行して來ると、遙か前方右手の深林から、悽まじい怒號と共に猛然として、三頭の巨犀は角を揃へて躍り出した。常に此平原を旅するものは、滊車の窓に恁れた現寢に、猛獸の聲を聞く事も稀らしくないのだ。扨こそ襲來！と思ふ間もなく二分三分――軈て最も巨大なる一頭は線路の枕木に躍り上つて、千鈞の力を籠めて前脚の鐵蹄で、貨物

車の扉を打破らうとした。兼てより、斯る可しと覺悟して潛んでゐた鐵道係員は、機到れりと衝と半身を車窓から乘出し樣、銃口を怒れる犀の鼻面に向けた――沛然たる猛雨の底に長蛇は黑烟を吐いて走る。半狂亂の猛獸は遲れじと走りながら躍りかゝる。危機一髪巨犀の前脚が貨車の扉にかゝつた途端、ドーンと一發、二發、三發、續けさまに彈ち出された銃の音。猛獸は地響させて空しく線路の上に打倒れた。斯くと見た二頭の犀はその儘のそ〳〵と林の蔭に姿を匿して了つた。

一時間前の格闘を思出して土人は切りと身顫ひをしてゐる。雨は益々烈しく、斃れた犀の腥さい血痕を洗つて降る。

第二信

メンロックの水牛狩

五　突如怪獸に逐はる

土人の目擊談を聞いて、些なからず恐怖の念に襲はれた僕は、血塗れの怪獸を後にして前方に出發した。雨に濡れた荷物は酷く重くなつて、脊骨が曲りさうに痛い。氣味惡く濡れた襯衣を絞りあへず、其夜も部落の豪家に一夜の宿を乞ふて。翌日未明に發足した。この日、雨はやんで高原を罩めた霧の深みに矗立した樹梢

が霧の流れるにつれて隱見する、エーリヤを距る廿四哩程の地點、相も變らずてく〳〵と歩いて行くと、霧の波は益々濃く、眼に映る綠の戰ぎが風の去來に揉まれて、茫々と際涯なく續く。

午前の十一時頃、二抱えもあらうと云ふ綿の樹蔭に腰を卸して、晝餐をつかひかけると突如、怪しい獸の聲が聞えた。

『キョー〳〵』

と鳴く聲は霧を裂いて物凄く、遮るものもない高原に傳はつて空に響く――この聲を聞くと等しく、僕は喰ひかけの罐詰を放り出して、荷物を大急ぎに脊負つた。日本刀を杖にして、恐る〳〵首を擡げる途端に、亦してもキョー〳〵と大な鳴聲が聞える。什麼やら此方を指して來るやうだ。

中腰になつて五六歩進むと、野川の水が流れてゐる。ソワの葉に水の面は鎖されて、葦の類が身の丈程に兩岸に繁つて居る。屈強の隱れ家と思つて、雜草の裡に潜んでそろ〳〵と伸上つてみると、河を隔てた前方には涯もなく草が伸びて居る——その草つゞきに約一町も隔だつた處、一二本の立樹の下に怪獸は姿をあらはした。片唾を呑んで凝と見ると、紛れもない巨きな犀だ！！胸の邊まで雜草に埋まつて、胸から上をぬつとあらはしてゐるが、恐しい角は見るからに氣味が惡い——血——線路——瞬間の回想は昨日目擊した悽慘なる猛獸の最後を胸に映した。

危險！犀は僕が草を分けて逃げにかゝるのを發見した！

浴せかける樣な怒聲は、高原の空氣を震動して、猛犀は僕を逐

うて來る氣勢だ。僕は四匐になつて、暫らく草の蔭を這つて行つた。一聲亦一聲、次第々々に近づくと僕の胸は裂けるかと思はれる程動悸が高まつて息が機む——接近した。犀は小川を隔てた草叢まで接近して、再び三度キヨーと飢えたやうに聲を張上げて啼いた。僕は痺れたやうに地に突伏して了つた。何の態だと笑ふを止めよ。猛獸狩を標榜する吾輩と雖も、この場合これより他に執るべき方法が莫かつたのだ。宜し猛獸の眞向から、日本刀を振被つて斬込んで行つたとて、金佛に芋殼程の事もない。只敵に嗅ぎ出されゝば其迄だが、遁るゝ丈は遁れて見やうと、濕つた地に顏を伏せて、稍一時間程冷汗を流してゐた。

天祐？犀は間もなく僕を見捨てゝ行くらしい、物凄い聲は漸次

に遠ざかつてゆく――密と起き上つて窺つてみたが、全く襲來の危險範圍を脱したやうだ。此間に逃げ出さうと思つて、荷物を搖りあげて十歩、廿歩、後を氣支ひながらものゝ一町も歩いた、と思ふ間もなく右手の草叢にギョーと云ふ聲が起つた。僕は脊骨をどやされたやうに吃驚して、後をも見ずに駈け出した。

若し草の根に脚を取られて打倒れゝば斷末魔、犀の角と日本刀と各らが折れるか、力較べをしなければならない。僕は無我夢中で驅つたけれど、重い荷物は首筋に當つてがた〳〵する。到底野に馴れた四足に敵ひさうにもない。

危機一髪！

犀は後方十數間の距離まで肉迫した！！

六　水に投じて避難

地響をさせて草叢を踏む鐵蹄は、凄まじき勢で逐かけて來る僕が生命は風前の燈火である。彌々犀の前脚に叩き倒されて。無惨な屍體を熱帶の原頭に晒す事か――僕は日本刀の鞘を拂つて胸に擬した！刹那、僕は荷物の背負革をふつゝりと切つた！身輕になつたが後方を回顧る餘裕はない、無我夢中に駈出す鼻先――這は奈何に野川の落合ふ深い堰が渦卷いてゐるではないか――南無三前に碧潭！後に巨犀！身體谷まつた瞬間、僕は什麼でもなれと叫びさま、白刃を提げた儘ざんぶと斗り水中へ躍り込んだ。

犀が水邊に猛悪な面を突出すと、殆んど同時に、僕は水草の葉

を額から被つて、行衛を眩ました。天の救けか僕は辛くも免がれる事が出來た。然し僕も今度は充分要心して、浮かり顔を出さなかつた。氣味の惡い水中に、約一時間ほど浸つてゐたが、何としても岸に登る勇氣がない。一層川のなかを辿つて行かうと首つ丈の流れに押されながら、二三丁下流までやつて來た。流に沿うて一軒建の土人の家がある。僕は濡鼠のやうになつて裏口へ這ひ上つた。年老つた土人は、僕を見ると唇を反らせて

『貴樣は何だ〳〵』

と怒鳴りかける。成程怪しまれるのが當然だ、縮の襯衣は水垢によごれて、肌にへばりついてゐるのみか、藻草を被つたヘルメット帽から水が滴てゐる。加之に見馴れぬ氷のやうな日本刀を、拔

身の儘に提げてゐるのだもの……

『怪しい者ぢや莫い、今犀に逐はれて遁げて來たのだ』

『犀に逐はれた！』

と土人の顏色は見る〳〵變つた

『暫らく隱れさせて呉れ、散々な目に逢つたのだ』

『駄目だ、隱す處か早く何處へ行つて呉れ』

『何故？』

『お前を隱せば俺も一緒に、犀に殺されて了うから……一度見つかれば畜生、屹度逐かけて來るに決つてる』と地獄で佛も恁うなつては空頼みだ。然し今更他に隱れ家もない。拜むやうに土人に縋つて、不性無性に隱して貰う事にした。

『さあ静かにして居ろ』

と押へるやうに警戒して置いて、大急ぎに土人は水を汲んで來て、炊きかけの餘燼を消した。妙な事をするなと思つたが、何の事と確かめる間もなく、土人の云ふが儘に裏口から飛出して、遠くの森の樹に登つて静動を窺つた。不思議！巨幹には蔓草でなつた繩で、荒板を縛つた足場が造へてある。何の用にするのかと聞くと、それは犀狩の獵師が作つたのだと判つた。

犀は人聲と煙が大厭ひである。而もその厭ひなものに向つては、必死の勇を鼓して猛進して來る。先刻土人が餘燼を消したのも、炊煙をあげまいとの杞憂に過ぎないのだ。水中に影を見失うた犀は、必らず人間の行衛を捜してゐるに違ない。若しその血走つた犀

の目に、一縷の煙が映つたら最後、犀は傍目も觸らず突進して來る——と土人は樹の上で話した。

俄然土人の言は命中した、ものゝ一時間も經たぬうちにキョーキョーと吠える聲が斷續して聞えた。

午後四時頃、最早宜からうと歸つてみると、氣の毒にも土人の家は、床から座數まで、犀の足跡が印されて狼藉を極めてゐた。

『チョッ、畜生亦荒しやがつた』

と土人は忌々しげに呟いた。

七　挑戰の合圖

危うく巨犀の襲擊を免れた僕は、聽て土人の家を發足して、ビ

ルマ街道の、メンシンと云ふ部落に到着した。折柄明後日水牛狩をやるからと聞いたので、好機逸すべからずと、早速村長に賴み込んで水牛狩の列に加はる事になつた。彌々當日(十七日)となるや、早朝に起きて日本刀を腰に佩き、土人の家から舊式の銃を借て射手と一緒に獵場を指して急いだ、軈て二哩先のメンロック村の並木端に出ると、獵を本業にしてゐる、八十名の土人の射手と、村々から狩立てられた百餘名の勢子が、樫の六尺棒を携えて、がやゝと集まつてゐた。この地方は遲羅ビルマを通じて、一番多く水牛の棲息する處なので、些なくも二三十頭、多くは七八十頭の水牛の群が畑を荒すので、殆んど農業も營み兼る處から、年に二三度廻狀を廻して、水牛狩をやる事になつてゐるのだ。

霧雨が晴れて曉氣が明るく照らす頃、各々部署についた。僕は射手と共に奥まつた第四戰區の並木の枝にのぼり、前日に用意した足場に腰をかけて、銃丸を調べて待構えた。

間もなく六人の屈強な土人が銃をかついで、遙か向ふへ駈け出した、と思ふとドーン〳〵と銃の音が聞える——と今迄喧々と騒いでゐた射手も勢子も一齊に鳴をひそめた。銃の音は亦聞える。之れは誘き出しの發砲で、水牛の群に向つて戰ひを挑む合圖である。果して猛然たる水牛の怒號は、高原の樹木を震動させて突發した。

見る〳〵六人の土人は、銃を捨て、繁草を分けて逃げ出して來た。と思ふと、草の種に姿を沒した。瞬間僕は樹の上枝に上つて

敵軍襲來の光景を望見した、――約六町の前方――數十頭の水牛は角をならべて突撃して來る！！

八　野獣と土人の格闘

軈て、眞先に立つた五六頭が草叢に飛込んだと見ると、俄に横さまに打倒れた。後から驀進して來た水牛は、倒れたものには目も呉れず、踏み越え〳〵猛進して來る。疎林も雜草も散々に蹴折られて、忽ち大きな路が開かれる。どつと暴風のやうな勢で敵軍が通過した第一戰區には、數頭の水牛が殘つた。突如。草に伏して居た棍棒隊の勢子は、ばら〳〵と飛出しさま六尺棒を振被つて水牛の眞向から躍り懸つた、此處には地上三尺位の高さに藤蔓

をより合せた荒縄を張つて、敵の先鋒隊の足を掬ふ戰略である。夢中になつて飛んで來た水牛は、前脚を取られて倒れる時鼻面を撲つた上、味方の蹄にかけられて半死半生に弱るのを附入り、棍棒隊が取圍んで闘殺すのだ。

戰闘開始！角を振つて薙ぎ倒さうとする狂亂の野獣と、素裸な土人とが、白日の下に入亂れて奮闘する。棍棒の閃めき數分間にして、四頭の水牛は地上に斃れた！

此時猛然たる水牛軍は、地響きをさせて第二戰區に肉迫した。人と獣はものゝ十間も離れてゐない。並木の枝の足場に突立つて荒縄を手繰寄せて、土人の多勢は戰機熟せりと見て、わつと鯨波の聲をあげて敵を怒らしめた。この喊聲に驚いた水牛は、脚も折れ

よと走けよる途端、一面の草叢はどゞつと凄じい響と共に地が裂けた！陥穽だ！！一頭は眞逆さまに陥いると續いて五頭十頭——巾一丈長さ數間の陥穽は水牛を以て埋まつた。飛出さうとする頭脊は、用捨なく味方の蹄にかけられる。藻掻けば藻掻く程、四脚は泥濘に埋まつて腹部まで土が着く。泥濘を深く盛つた陥穽には、棒をわたし莚を敷いた上に草を乗せ、巧に水牛軍を捕虜にしたのだ。

戰局は益々發展して猛烈なる敵は第三戰區に突進した！

九　擊て！遁すな!!

第三戰區は陥穽に續いた並木で、今眼の前に泥濘に落ち込んだ

水牛群の落武者が、恐ろしい怒號と共に驀進して來た。手に汗握つて見てゐると、巨幹の足場に待構えた土人の顏色は、見る〳〵變つて身を屈めたかと思ふと、する〳〵と各自に投げ繩の用意をした。好敵御參んなれと許りに呼吸を圖つて居るとも知らず、血走つた眼を剝いて半狂亂の水牛は、並木の蔭を驅拔けやうとする。

戰機は熟した！！礫のやうな懸聲と共に、樹の空からばつと輪を描いた蔓繩が投げられた。はらりと解けて水牛の鼻面を撲つたが手應えない。あなやと思ふ間もあらせず、ばらり〳〵と蜘蛛の巣を張るやうに數十條の投げ繩が、水牛の前進を遮たげて角を絡もうとする——發止！！一條の投繩は物の美事に一頭の首を捲いた！

それつと斗りに繩を離すと、其儘諸に飛出す途端恐ろしい叫び

と共に、水牛は咽喉を締められた。投げ縄の一端は巨幹に固く結んであるので、前進する强力で跪くも水牛は罠にかゝつた。水牛は遁れやうとして藻掻く、藻掻けば藻掻く程縄は堅く締る——巨幹と水牛は針金のやうに張りつめた一條の縄で繋がれた！

五六人の土人は、素迅く樹から飛び降て水牛の前面に立向つた手に〳〵短かい縄を持つて水牛の脚を縛らうとするのだ。荒れ狂ふた野獸は、容易に其手に乘らぬ。必死の力を絞つて縄を離れやうと焦る。水牛は角を揮つて一聲高く怒號した。危險、有繋の巨幹もゆら〳〵と搖いで、縄は將に切れんとした！土人の群も機を見て遙かに逃げ出した。

『撃て！逃すな！』

と云ひながら、草叢から飛出した二人の射手は、駈けよりさまに狙を定めてドーンと發砲した。銃聲が聞えると同時に水牛は躍りあがつて荒縄を振切つた！射手の生命は巨角の先にかけられた——が辛うじて縄を離れた水牛は、既に奮闘力を失つて間近な個所に、打倒れた。

陷穽から飛出した二頭は、第三戰區の投げ縄を首にかけられ、前脚の浮く處を縄の端をきり〳〵と釣上げられて、四足を縛られた。其儘其處に打倒された。土人の投げる縄と云ふのは、藤蔓を捩り合せた上に、椰子の油を塗つて手滑べり宜い縄で、千斤二千斤の水牛も容易に繋ぎ得る丈夫な物だ。

十 初陣の功名

第三戰區の光景に氣を取られて居るうちに、水牛軍は早や數間の距離まで肉迫した。第四戰區――僕等の役目は單に水牛を射殺せば宜のだ。が始めて戰線に臨んだ初陣の吾輩は、足場に突立つて銃の狙を定めたが、五體が顫へて咽喉が渴く。その時の光景は到底言葉につくす事は出來ない。角をならべて突進する水牛軍の先鋒に向つて、第一番並木の端に居た射手が先づ火蓋を切つた。水牛狩の兵法として先へ來た奴を入口の射手が擊つ、それでないと横に逸れる恐れがあるから恁うするのだ。卅餘名の射手は遁さじものと彈丸を浴せかけるが、火藥の多くが密造の弱いもので、自

然彈丸の効目が薄いが、其でも十分に渡る銃火戰の後、七頭の水牛は血に塗れて倒れてゐた。

意外の獲物に雀躍した勢子は、一齊に駈け集つて棍棒を揮つて手負の野獸を撲きのめす。水牛狩が一段落を告げた。我輩は初陣の功名に最も巨きな一頭を仕止めた。

第三信

その後の悲劇

十一 石蓋の下は血の海

腕だめしの狙ひ擊ちが、圖らず初陣の大手柄となつて、今日の

水牛狩のうち吾輩の撃ち止めた一頭が、尤も巨きな獸であつた。恁くて獵も一段落を告げると、欣々として射手も勢子も、獲物の附近へ寄集まつて來る。夥しい蹄の跡に爭鬪の俤は見えて、打倒れた水牛の骸は、毒々しい血を浴びて居る。一體水牛のうちでも陸棲の種類は毛が短かく而も猛惡である。射手隊の的になつた獸は無慘にも蜂の巣のやうに彈を打込まれてゐる。其は然うと、這麽巨きな獲物を什麽して、運搬するかと思つてゐると、二三人の土人は樹にのぼつて、大きな枝にぶらさがつて搖さ〳〵と搖る。ぽつきと折れるのをもつて來て、木の葉のついた儘の枝と枝とを組合はせて、橇をつくつて其上に水牛の骸を乘せて、勇ましい掛聲を先に、部落を指して立歸るのであるが、打留めの第四戰區を引上げて

第三戰區へ來てみると、投げ繩で四足をくゝられた水牛が、藻掻きながら路傍に倒れてゐる。

『この水牛は什麽して搬ぶのか？』

と訊くと、この儘二三日放り出して置いて、空腹くなる時食物を宛がつて、馴らしてから村へ連れてゆくのです』との事陷穽の泥濘に落ちた水牛も同樣の方法によつて、手なづけて耕作に使役するのである。

彌々勢揃ひをして引上げやうとすると。

『ネープルアンが見えない。』

突然勢子の群から不安の叫は起つた。

『なにネープルアンが見えない、さあ大變だ、隱れ蓋を深せ！』

村長の土人は今迄の喜色に引かへ、異樣な眼をきよろつかせて一同に號令した。

俄かの凶變に勢子は獲物を放り出して、一目散に駈け出した。第一戰區の前方、當初誘き出しの裸男が、姿を沒した草叢の方面を指して搜索にかゝつた。僕も何か知らず胸がわく〳〵して、後から駈けつけて見た。

水牛が蹴散らして走つた後の草も樹も、滅茶〳〵に踏折られてゐる處に、怪しい石の蓋があつた。幅三尺長三尺位の平らな石で、土人がぐいと引退けるのをみると、地下に人間が屈める位な穴が掘つてある。其怪しの石蓋は、五つ六つ附近に散在してゐる、之は誘き出しの土人が、水牛の群に挑戰の發砲をして、敵を誘き寄

せてから隱れる處で、いくら脚の迅い土人でも、直樣水牛には追つかれるから、この穴に飛込み頭の上に石蓋を破つて水牛の蹄を避ける。水牛は石蓋には氣がつかず、其上を躍り越えて突進するのだ、

『此處だ〳〵、アンは踏み殺された』

杞憂は果して恐るべき事實となつて、一同の胸を衝いた。悵然として取圍んでゐる土人の肩を透して覗き込むと悲慘！ 悽慘!! 石蓋を跳ね退けられた穴のなかに、一人の年若の土人が、首骨を折られて死んでゐる。折角被つた石蓋も、不幸にして水牛の蹄に踏折られて、土中に蹲んだ儘、踏殺されて了つたのだ。眼鼻口から迸出した鮮血――有繋は土人の眼にも熱い涙が浮んで居た。

十二　屍體を脊負つて歸る

誘出しの役に當つた健脚のネープルアンは、無慘や水牛の蹄に首の骨を蹴折られて非業の最好を遂げた。折角の狩の戻りも、待つ人の心を思やつて、土人の頰は熱い涙が流れてゐる――誰も彼も我が身の上に思くらべて、永劫に隱れ蓋の下に眠るべき渠の末期を、痛ましく語り合ぬものは莫い。蕭として聲なき高原が、白光のもとに照し出されてゐる邊……木の葉を敷いた橇にのせて、血塗れの水牛の骸が晒らされて行く――續いて悲慘なアン。屍骸は土人の脊に負はれて、とぼ〳〵と部落を指して歸つて行く。篠つく許りの猛雨は沛然として降り出した。軈て部落の入口に着くと、素

裸な女子供が樹蔭に群をなして待つてゐた。

すると眞先に駈け出して來た、年若い土人の妻があつた。

『アンが怪我をしたさうですが、何處にゐます？』

と不安な言葉さへ顫ひを帶びてゐる。アン。妻だ。誰もこの新妻に向つて、冷たい骸の所在を語る勇氣はない。口を噤んで顏を見合せて居る。然し何時まで恁うして惑はせるのも不愍なものだ。村長は慰め顏に　アンの兇變をかい摘んで話した。アン。妻は倒れん許りに驚いて、異樣な聲を張り上げて泣き出した。而して涙を押えながら勢子の群に駈けよつて。

『アンは何處にゐる？』

と繰返して喧ぎ歩いた。悲慘！アンの屍體は妻の腕によつて抱

き卸された！

『何故死んだの〳〵』

と人目を憚らず泣わめく。鮮血の腥く流れた眼鼻にも、冷たい死の影は暗く浮んで、妻が熱い涙も枯れた根草に、一滴の水ほどの効も見えなかつた。

嗚呼、土人の若き妻よ。人々も慰めかねて呆然と佇んでである。僕は其場から村長に導かれて家路を辿つた。

その夜、凉しく暮れてゆく灯の影に横たはつて、村長の家族から氣の毒なアンの經歷を聞いた。

ネープルアン(三十)は、この部落に生拔の無資產の勞働者であつた、處が附近に輸出を營んでゐる、暹羅人の娘(今の妻)と馴染たが

此地方の習慣として、總て賣買でなければ妻を娶る事が出來ぬ、結局女房の容貌體格に應じて代金を拂つて買受けるのであるから夫婦の情愛なぞは殆んど見たくも見られない。扨てネープルアンも什麼かして一緒になりたいと思つたけれど、娘の父が八百チカル(一チカル七十三錢)でなければ何としても娘を渡す事は出來ぬと云ふて拒絶した。汗を絞つて其日〳〵の糧を獲るアンが、何として八百チカルの大金を握る事が出來やう。所詮望の叶はぬと諦らめた兩人は、手に手をとつて家出した。これが亦破天荒の珍事なので、一事は大した評判であつたが、兩人は賣買結婚の垣を破つて、アイチャの都で前後三年の漂泊生活をつゞけてゐた。それを娘の母が聞つけて、自分の指環と金とを送つて、改めてアンの手から娘の

父へ八百チカルを土産として無事に賣買結婚を濟せ、久し振に郷里の空に晴れて夫婦となつたのは一年足らず前の話である。その相愛の夫が悲慘な最期に冷たい骸となつて戻つた時、新妻の深い恨は涙の雨となつて、見る者の袂を濡らしたのであつた。

十三　葬式に水牛の生首

涙の多い漂泊の旅をおえて、息らかな故郷の空に家居してから僅か一年、圖らぬ椿事に夫を失つたメールアンの悲痛は云ふまでもない。その夜は、まんじりともせず、屍體に縋つて泣き明したが、翌日は彌々葬式を出す事になつた——普通ならば水牛狩の翌日は村祭をやるのだが、アンの凶事に遠慮して、先づ葬式を濟ませてからと云ふ事になつた。

僕も葬列に加はらうと思つて、刻限をはかつて村長と同道して出かけて行つた。アンの家は村端の小高い丘にあつて、多勢の村のものが寄集まつて居た。彌々出棺となると、家内からけたゝましい女の泣聲が聞えた。メールアンが什麼しても夫の屍骸を放さぬのださうな。賣買結婚社會では殆ど見られぬ異數の事で、何か繰言を繰返しながら騒いでゐる。然し其も漸やくに慰め、さてやつと出棺となると、二名の土人が汗を絞つて、長い竿をかついで先頭に立つ——見ると竿の尖には素晴らしく巨きな水牛の角をさして高く捧げてゐる。日本ならば高張提灯の格だ。續いて水牛の生首を角のまゝ斬つて竹にさして持つてゐる。此は死者の靈を慰

めると云ふので、昨日の獲物中一番巨きな水牛の首を犧牲とするのである――パノンを着けサロンを捲いた土人の群がならぶと、家内から棺は運び出された――と見ると這は不思議、昨日水牛狩で見知越しの土人を始め、七人の男女が頭を剃つてくる〳〵坊主になつて出て來た。新妻のメールアンも頭を丸めて白のパノンを着けてゐる。土人は葬式の時にのみ白を用ゐるので、赤銅色の裸體に際立つて見える。メールアンは眼を眼赤にして、黑い額口から俄かに頭がつるりと剃りあげてある。氣の毒ながら噴飯したくなつた。死者の近親の男女は總て頭を丸めるのが古來の儀式であるさうな。

聽て葬列は水牛の角を眞先に、山際の寺院を指して進んだ。迎へ

僧は來ない事になつてゐるのだ。會葬者は白檀の樹で造つた椿のやうな造り花と、蠟燭を一本づゝもつてゐる者や、香の高い夏草を絲に貫いた珠數を手にかけたものや、有繋に肅々として白光のもとを歩を運ぶ、――菩提樹の茂つた大伽藍に着くと、多勢の坊主が出迎えて、棺は葬堂にかつぎ込まれた。香染の僧衣をかけた師僧を眞中に、多くの僧がづらりとならんだ。師僧は起上つて彌陀の本尊の手に、長い絲の一端をかけて、その絲の端を十數人の僧の手から手へわたして、扨て讀經が始まる。――此時僕は偶と長い間の謎が解けた。それは日本で平安朝時代の、佛を咏じた和歌に『彌陀の手にかけたる絲の』と云ふ歌があつたが、鎌倉時代以來は殆んど其註釋も解らなくなつて了つた。今恁うして異鄉の寺院

に葬式をみて始めて歌の心が讀めた。

逼麼ことを考えてゐるうちに經は終つて、棺はする〳〵と曳おろされた。境内にある大火鉢の上には鐵の棒を渡してその下に薪が積んである。これが火葬する場所だ。蠟燭の灯がちら〳〵と赤く灯された。竹の先にさした線香の煙がすーッと立のぼる。會葬者は持つて來た造花に蠟燭の灯を移して、更に棺下の薪に火をつけた——メールアンは聲を絞つて泣いた——立のぼる寂しい煙を後に見て僕は寺院を辭し去つた。

十四　土人娘の裸踊

翌日僕は通りかゝりにアンの家を覗いてみた。日は晴れながら

有繋は家内は打濕つて、くる〳〵坊主になつたメールアンが何やら經文を讀んでゐるらしい。僕の姿をみると、是非〳〵と手を採らんばかりに曳入れる——不思議な事と思つてゐると、日本の經をあげて呉れと云ふのだ。

言ふのを忘れたが、僕は猛獸狩の途すがら宗教研究を思立つたので、新嘉坡を出發の際、香染の七條の袈裟を疊んで荷物のなかへ入れて置いた。郷里信州にある時から、久しく佛門に出入した僕は多少の經文は暗んじて居る。恰度いゝ折だから、袈裟を取寄せて觀音經と般若經一卷を讀んでやつた。日本のお客が經を讀むと云ふので、村の坊主もやつて來た。アンの知己親族も集まつて來てゐた。陀羅尼は不醜語でギャーテー〳〵と云ふのは、遍羅も

日本も變りはない。辛くも俄か仕立の坊さんになりおほせて、芭蕉酒の馳走になつて家に歸つた。

メールアンは門口まで送つて來て繰返し〳〵禮を述べてゐた。

午後の三時頃から水牛狩の捷祭が始まつた、昨日アンの柩を送つた土人の頰には涙の跡も乾いて、莞爾やかな喜色が溢れて居る。老若男女がバノン、サロンの服裝で、いそ〳〵と歩いてゐる。廳て會場に宛てられた廣場には宴會が始まつた。水牛の舌の皮を剝いで、ラオ酒につけた珍味には、例によつて唇も裂けるかと思ふやうな唐辛がつけてある。がや〳〵と騷ぎ廻るうちに、輕い醉が頰にのぼると土人は蕃歌を歌ひ出す。怪しげな腰つきで踊の手振を誇るのもある。日も黃昏の淺い闇に凉風が生れて來ると、蠟

燭の灯は星のやうに、竹の先へさして會場のぐるりへ立てられる、踊が始まるのだ。

待つ程もなく踊子の足拍子は揃つた。年若な土人の娘たちが、赤や黃のバノンをはいた、艶の宜い裸體に灯がちら〳〵と映るとマイを捲いた豐かな胸乳が搖れる——右の手に稻の穗の一尺許りに伸びた束を握り、左の手には鎌をかざして、單調な踊をつゞけながら唄ふ。囃方は木琴、太鼓、銅鑼を叩いて騷ぎ立てる——と僕の肩に手を置いたものがある。誰だらうと思つて回顧ると、豈圖らんや頭を丸めたメールアンであつた。

『何しに來たんだ、踊りに來たのか？』

と訊くと淋しく笑つて默つてゐる。昨宵は夫の屍骸に縋つて泣

き明した女が、今宵は祭の踊の輪波を羨ましさうに眺めてゐる。

恁うしたものだ。と思ひながら漫歩きに時を移した。夜も更けてから裏路傳ひに戻つて來ると、月の光に照されてひつたりとならんで行く人影、確かに一人はメールアンで、他の一人は男の姿である。嗚呼理性のない戀の囚はれ、渠の胸には冷たい地下の白骨は忘られて、暖かい男の唇が戀しく思はれたのであらう——考へると晝間取澄して手向けの經を讀んだ自分までが馬鹿にされたやうな氣がした。彼女は夫の新墓が乾かぬうちに、幾百チカルかの金にかはれて、骸を他人に委ぬるのであらう！咄！

森を隔てた祭の庭にはほつと夜氣を模して灯が映つてゐる、僕は急いで村長の家に歸つた。

第四信

露宿して大蛇に襲はる

十五 椰子の灯皿

翌日僕はその村を出發して、次の村のマイトリーと云ふ村長の家に泊つた。最初僕が旅のものだと云ふて一泊を賴んだ時、主人と妻とが門口まで出迎へて、下へも置かぬ叮嚀な取扱ひ振、餘り敬意を表されるので薄氣味惡く思つてゐると、軈て主人が畏まつて

『貴君は日本の貴族ですか』

と思ひ設けぬ奇問に度膽を抜かれたが、今更然うでないとも云へず其儘默つてゐた。什麼いふ譯で僕を貴族と間違へたかと云ふと、由來この地方では、土地の貴族でなければ外國へ旅行せぬ習慣なので、扨こそ僕を貴族と早呑込みしたものと判明した。是非悠くり滯在して呉れと、心をこめた饗應に僕も其儘寛いでゐると、土人の妻も一座して何のかのと打解けて話し込む。兎角するうちに日が暮れると涼しい灯が運ばれた。

粗末なコップのなかに椰子の油を絞つて、木綿絲を眞に浸したもので、見るからに趣の深い灯皿である。村長の家だけに、遠い都から輸入した、秘藏のビールの栓を抜いて馳走して呉れた。繁葉をわたる夜の風に星影は爽やかに瞬く——久し振のビールの泡を

吹きながら、快よい醉心地に旅行談を續て居ると、隣室にピアノの音が聞えた。僕は思はず耳を澄して傾聽した。林の奥に駒鳥の啼くやうな胸をそゝるピアノの曲を、恁うした落部の宵闇に聞かうとは。

『あれは誰が彈くのです』

と訊くと、土人の妻は待構えたと云ふ風で。

『娘です、メーレンが彈くのです』

誇り顔に密と灯皿の糸を摘んで、明るい灯影に僕の顔を見上げた。

親子の愛！猛獸の聲に包まれて趣もない土人の部落に遙々と、ピアノを運んで娘の心を慰める親の情！僕は些なからぬ興味をも

つてピアノの曲の進むのを聞いた。聽て爽やかな曲につれて美い聲で俚謠を唄ひ初めた。實に美い聲だ。單調ながら澄みきつた整調は、確かに旅情を慰むるに足るものがある。

『大層美い聲ですな、一つこの座敷へ呼んで下さらんか』

と好奇心に驅られて頼み込んで見た。土人の妻は床を踏んで迎へに行つた。僕は全たく聲に魅せられて土人の娘と云ふ觀念を忘れてゐた——是音は扉の蔭で止んだ。ヴアイオリンの絃を弓がすべるとくすぐるやうな樂の音が響いて、

『カワーラブチヤチヤオ』

の曲を繰返へして唄ふ。これは暹羅の國歌で、日本の君が代と同じ意味であるのだ。僕は何となく娘に逢つてみたくなつた。折

返して一座をすゝめると漸やく出て來た土人の娘——僕は呀つと云つたなり開いた口が塞がらなかつた。赤銅色の丸顔に滅茶々々に白粉を塗つた面相の可笑しさ。これが美しい聲の主かと呆れて殆んど二の句が出なかつた。一體土人が白粉をつけるには刷毛と云ふものを使はない。兩の掌に白粉を乘せて、べちやくと顔へ塗るのだから、宛然淺間山の殘雪を其儘だ。見ぬ戀と云はゞ云へ、僕は聞を聞いた儘で美しい思出の花を、永久に胸の奥に活かして置きたかつた。

十六　山腹の露宿

圖らずメンロックの清夜にピアノの曲を聞いて、物憂い旅情を

慰めた迄はよかつたが、樂手？たる土人の娘をみるに及んで胸を鎖した哀愁の念も失笑の裡に紛れて了つた。翌廿二日其處を出發して、暹羅堺のルビー鑛山の多い處へ差かゝつたのだ。一つ話の種に鑛脈を探し當てゝ見やうと柄にもない山氣を出して辿つて行くと五尺餘りの雜草が頭の上まで高く伸びて、赤土つゞきの濕地には光を含んだ土砂が靴の跡を淺く印す。行けども〳〵其らしい心當りもない。嬲て漸次身體が疲れるにつれて、額を掠める葉摺が五月蠅くなるとルビーの事などすつかり忘れて了つた。一歩も早く深い草叢から踏出したい——と思つて遮二無に押歩いた。

午餐過になつても依然として草は頭を覆ひ被さつて、繁る。日暮方になつて漸く樹林の繁つた山肌へかゝつてほつと息を吐いた。

什麼せ宛のない旅だ。盡よ此處で野宿をしろ！！と覺悟を決めて腰を卸した。然し夕飯の用意は盡きたし、腹は空いて來る。がらんとして空を鎖した暗い繁りに、夕日の流れが冷たく映るのを眺めて、云ひ知らぬ寂しさに暫時茫然として、草を敷いて寢ころんでゐた。野宿の用意にと脊負つてゐた、荷物の革紐を解いて、旅行蒲團を伸べ、蚊帳の紐を木の枝にかけて裡へ這入つた。

じ、ん、と澄みきつた腦裡は、時計のセコンドを刻むやうに、血脈の通ふのも覺える位、怪禽の低鳴さへ鋭どく胸を射す——突如さや、さやと氣味の惡い葉ずれの音がした。ひよいと頭を擡上げて見ると這は如何に！蚊帳の裾をめぐつて恐ろしい大蛇の胴體が、草の根を靡げて、ずる〳〵と蜿つて行く——呀ッと驚いて飛上りさ

ま、蒲團の横に置いた日本刀を引寄せた。

息を凝してゐると、恐るべき大蛇の胴體は草を分けて遠ざかつた。三分！五分！辛やく危險範圍を脱した。然し最早僕は樂々と蚊帳の裡で、寢そべつてゐられなくなつた。人里遠いこの山腹で、毒蛇に嚙まれて死んだとて、僕の白骨は誰の手に拾はれるか判つたもので莫い。例令格闘するにもせよ、出來るだけの豫防はせねばなるまい、――と考えた揚句、妙案〳〵と手を拍つて雀躍した。早速蚊帳をもぐり出して、手頃の石を拾ひ集めた。而して蚊帳の裡にぐるりと石を置いて、此で宜しと日本刀を曳つけた儘寢ころんだが、暫らくは眼が逢はない。先刻の大蛇に襲はれたら！と眼をあくと、四圍は七分の闇と垂れて、戰なくやうな夕照の名殘が、樹

立の隈を糢して居る。

然しうと〳〵と晝の勞れに睡氣を催して、知らず〳〵ぐつすりと寢込で了つた。

夜は更けた。脚元がもづ〳〵する。羽蟲でも觸つたのだらうと思つて、脚をばたばたやると間もなく、咽喉元をぬるりと觸つたものがある。チョッと舌を打つて、手で搔き追けやうとする途端――僕は電氣に撲たれた如く跳起きた。

蛇だ！大蛇だ！

僕は闇中に日本刀を閃めかして突立ち上つた!!!

十七　怖ろしい大蛇の鎌首

闇中に大劍を閃めかして、突立あがつた吾輩は、この狹い旅行蚊帳の裡で熱帶の猛蛇を相手に生死を賭して搭闘しなければならない。然し殆んど逆上した僕は、星影も屆かぬ草叢へ、什麼して飛出したか無我夢中で、蚊帳を搔ね退けて、巨幹のもとへ走り寄つて

『さあ來い！』

と身構へた。柄も碎けよと雙腕に力をためて、ぴたりと脊を樹の肌につけて、唇を嚙〆めた。

大蛇は草を戰がせて猛進して來る。によつきと擡げた鎌首の恐ろしさ。靡いた草の上、地から三四尺の高さに、胴體をきつと反らせて、爛々たる兩眼は薄闇を射て危機は迫る——僕の五體は武者振ひした。大上段に振被つた日本刀を、斬下すにも一間餘りの距

離がある。僕は密と一足後へ退つた。二足三足樹について迴ると、大蛇も鎌首を擡た儘進んで來る。

僕は俄かにどつ〳〵と急いで樹をめぐつて、木の根に伏すや、日本刀を横に構えたと同時に、鎌首は樹の肌に付てぬつと出た。

好機！

僕は躍り上りさま、さつと横なぐりに一太刀浴せる、と誤ず命中した。凄まじい響と共に、大蛇は狂ひ出した。二太刀、三太刀續けさまに斬込んだが、當初の一太刀が敵の咽喉を斬つて、餘勢は樹肌に深く割込んた。僕の策略は甘々と成功した。大蛇を相手に、平地の戰は到底普通では駄目だ、と聞いてゐたので、樹の肌へ斬つける意に浴せかけた太刀風は、美事猛蛇へ、致命傷を喰はせたのだ。

血を含んだ日本刀を拭つた。悽慘なる樹下の光景は、闇に葬られて見る事が出來ない。氣味の惡い動悸を押えて、露宿の蚊帳へ戻つて來た。

夜は徒らに更けて、腥い風が颯々と草を渡る。羽蟲の飛ぶにさへ氣が置かれて、到底横になる勇氣は莫い。月光はいつかゝげつて疎らな星は暗雲に呑まれて消える。——午後十二時、沛然たる猛雨は、篠突くばかりに降り出した。

亦降り出したな、と呟いたが仕方がない。蚊帳は吊り放しに、蒲團だけくる〳〵卷に片づけて、僕は傍の樹の上に登つた。雨は刻々に猛然になる。僕は大きなタオルを枝に縛りつけて、其を枕にして、思ふさま胸をはだけて雨にうたせた。雨脚がものゝ一時間も

續いたと思しき頃、草叢は一面の流れとなつて、山腹の傾斜は恐ろしい水聲に洗はれる——意外、幾十疋となき小蛇がぞろ〳〵と樹に登つて來る。一難去つて亦一難。蛇の襲來には殆んど閉口して了つたが、當るに任せて斬落しながら夜の明けるのを待つた。

蛇は俄の猛雨に、草叢をのがれて樹に登つて來たのだ。

散々な目に遭つて、山腹の一夜は明けた。樹から滑り降りると、約數間距たつた樹下の草裡に、長さ三間足らずの大蛇が死んでゐた恐ろしい猛蛇の血は、昨宵の雨に洗はれて、腹裏の青い縞が紫がゝつて、だらりと横たはつた光景！

僕は今更のやうに身顫ひした。

十八　變な啼聲

間一髪の危機に際して、美事に猛蛇を斬殺したのは、眞に天祐であつた。雨上りの日晴の杜に、爽やかな鳥の囀が傳ふて、濡れそぼつた繁草には、曉氣が鮮やかに波を釀す――僕は蚊帳を絞り、卷蒲團を捲いて、出發の用意をした。幾度か放り出しては拾ひあげた鐵葉の藥罐を提げて、鞘の儘の日本刀の杖、大蛇狩の誇るべき奮鬪談を土產として、僕は山腹から裏山に越えた。路が樹ぐれの峽に降ると、低きについて流れる泥水が路を埋めて、一歩は一歩より判らなくなる、爪先探りに辿つて行くと、はつと思ふ瞬間、足を滑らしてざんぶと斗りに深みへ陷ちた『失策つた』と叫ぶ間もなく、肩

の邊まで水に浸つた。

藥罐の蓋は流れる。全身は濡佛になる。――散々な目に遭つて這ひ上つたが、前夜から飯を喰はぬ悲しさには、空腹が募つてへとへとに疲れて了つた。午後三時頃、漸やく土人の家を探し當てたので何は扨置き飯の馳走になつて、宵の口からぐつすり寢込んだ。

翌日其處を出發して、五哩先のルーサン近くの部落に辿りついた、ルーサン近在はバナナの名所で暗綠の葉がくれに、バナナの房が鈴なりに熟してゐる。僕は土人と途づれとなつたが、籠に入れた甘さうなバナナの香が、荒んだ胸裡に懷かしく通ふ。僕は相當な價を拂つて一房を買つて、歩き〳〵喰べながら話して行つた。突然前方の草叢に『シヤッ〳〵』と云ふ怪しい聲が起つた。

『何だらう、變な啼聲だな』

と立停ると、土人は籠を密と卸して、手頃の棒を拾ひ上げた。

譯ありさうな土人の素振に、事こそあれと僕も聲を潜めて眼を睜つた。怪しの聲は斷續して鋭く聞える。土人は拔足差足で、棒を振上げたまゝ、草叢に忍び寄つた。さつと草をなぐと、二尺許りの怪物が、勢猛に飛出した。

蜥蜴に似た鼠色な、脊へかけて頭から襟首まで、黄色い粗毛を被つて頭の大きい動物である。トツケーの一種だ。氣味の惡い恰好をした怪物奴、シャッ〳〵と啼きさま二三尺づゝ一飛びに突進して來る。土人は懸命に打留めやうとして、棒を振まわすが手におへない僕も小敵と見て好奇心にかられて、例の大刀を拔はなつて斬つけ

た。

發止！手應があつたが、カーンと石を打つやうな響と共に刀は跳ねかへされた。怪物の脊には有繋の日本刀も刃が立たない——何とかして頭の毛なりと土産にしたいと、一生懸命に逐かけたが、何時の間にか怪物は樹の空に登つて、シャッ〳〵と啼いてゐる。

忌々しいが仕方が莫い。土人と別れて、僕はサームラに到着して、タームランと云ふ豪家に一泊した。然るに圖らずも泊り合せた諸威人チャンルード氏が、虎狩に行くと云ふ噺を聞いて、僕は其一行に加はる約束を結んだ。

第五信

壯快なる高原の虎狩（上）

十九　虎狩の首途

村長タームランの家に、泊り合せた諾威人チャン・ルード氏は、頗る洒落の好紳士で、而も戰場萬場往來の剛者、身振手振を交せて興味ある猛獸狩談を續ける。僕もタームランの家族も、挪子の灯皿を圍んで、熱心に傾聽した。僕も逸す可らざる好機と思うて、同行の希望を述ると、快よく承諾して呉れた。ルード氏は今回印度地方から、ビルマを經て遠く馬來半島へ、虎狩に來た途次であるので、

村長タームランが、狩の案内者となつて、手馴れの勢子を召集する手筈に成てゐるのだ。氏の話に依ると、遏羅灣に面した一帶には、餘り多くの虎は住まず、山の手に多く棲息するが、人の影を見ると、逸早く姿を沒して了うのが例で、先方から進んで危害を加へる等の事は、殆んど稀であるさうな。

彌々虎狩の首途となると、目的地はサターの一部、俗にクラーナと呼馴れた高原である——出發に先立つて、未明の夢の現な頃蠻聲を帶びた竹法螺の音が響き渡る。集まれの合圖だ。僕もルードと一緒に急いで身仕度をした。極めて身輕な襯衣一枚に日本刀、土人から借りうけた舊式の鐵砲を擔いで家を出た。群をなした勢子の面々には、チークの棍棒を提さげた徒歩立ちもあれば裸馬に

跨がつて石弓を握つてゐるものもある。間もなく小山のやうな巨象が幾頭となくのそりのそりと樹立の蔭の土人の家から曳出されて來る。見ると巨象の脊には、深さ三尺五寸長さ六尺幅四尺位な堅牢なる箱が、長い腹帶で確かと縛りつけてある。僕はルード氏と一緒に、最も優勢な象の脊にのぼつて箱に這入つた——この箱には、射手が二人宛乘れるやうになつてゐるので、一人は前方、一人は後方と、猛虎を敵に狙撃ちの、腰までは箱の裡にかくれて、剃刀のやうな毒爪を避けるやうに出來てゐるのだ。

日影が朧ろ明るくなると、象の首に跨つた土人が、身を屈めて耳の下を叩く。象は其方向に悠々と、巨幹のやうな脚を運んで搖ぎ出した。先鋒はタームランの乘つた第一陣。僕等の象は第二陣に、十

六頭の巨象は、前後して出發した、異觀！壯觀！僕は此燦んなる虎狩の列に、參加した事を欣ぶと同時に、將に開展せらるべき修羅場を、胸に描いて眼も放たず前方を睜めた。

程なくクラーナに到着した。茫々たる草は、巨象の脚を埋めて繁つてゐる。歩武堂々たる戰陣は、三角形に布かれた。象の頭はぐるりとならんで、いざや來れと戰鬪準備が整ふた。

猛獣狩の常例として、裸馬に跨がつた六人の土人は、馬首をならべて疾風の如く、右手を指して駈け出した。誘き出しの石弓と云ふのは、荒木削りの木弓に絃を張り、礫を加えて引絞つて、猛虎の棲家に向つて挑戰を試みるのだ——雜草を打靡けて奔馬の姿は遠く隱れた。面々は鳴を鎭めて待構えた。

突如！山野に谺して、猛虎の喰りが雷の如く、高原の樹木を震はせた。

二十　雷の如き猛虎の叫び

猛虎の叫び！！茫々として際涯なく靜まりかへつた高原の一隅から、疾風の如く驅け戻る裸馬の馬首が眞一文字に雜草を突く——と見る刹那。雷の如き猛虎の叫びは起つた。將に晴天の霹靂である。谺返しの怒聲は悽まじく聞えるが、未だ猛虎の姿は見えぬ。

裸馬が稍々二丁ほどの距離に驅拔けて來ると、逐かけるやうに悽まじい怒聲は加はる。一聲、亦一聲、草つゞきの野末から突發する——馬は益々走る。土人の身體は馬の平首にピタリと喰附い

てゐる——只ならぬ殺氣が迫つて來た。

襲來！二頭の虎の頭と脊が伸びた草の戰ぎを飛んで現はれた！

素破こそと銃を取直して、射手箱の裡に踞んだ。——此時象の鼻面は三角陣にならべられて、眞中の空地には誘き出しの馬を走りこませるのだ。土人を乘せた六頭の裸馬は、驀然に歸をならべて、陣中の空地に逃げ込んだ。無殘！馬は熱湯のやうな汗を流して、宙に走つた蹄もたまらず、ぶる〳〵と震へて居る。馬が虎を怖れる事は、鼠が猫を恐れる以上だ。

射手の面々はひつそりと構へてゐる。刻々に殺氣は迫る、——只だ巨象のみは悠々として、太い鼻を所在無さゝうに振廻してゐる

此時逸く先刻の猛虎は突進して來た！

射手箱の裡から目も觸らずに、打見やつた猛虎の姿勢、物凄さは言語に絶する。——虎と云ふては動物園の、檻で見た外覺えのない吾輩は、今眼前に蹄を磨ぎ、牙を嚙んだ猛虎の形相を見て、息の塞るやうに物凄く感じた。

長い尾をきり〳〵と尻股に捲き込んで、前脚をすゝめた敵は、烱々たる兩眼を見開いて、前唇も裂けよと許り、恐ろしい牙を嚙〳〵めてる上に、全面の毛は悉く逆立つてゐるではないか——力をこめて、〳〵つと跳るに一足に、七八尺位づゝ飛越える——俄然先鋒の象は勢が變つた。悠々閑々たる姿勢は失せて、猛烈なる怒氣は長い鼻にあらはれた。

肩を怒らせた一頭は、身を跳らして象の横手へ廻はつた、と見る

間にドーンと一發發砲したが手應へがない！失策た！此時速く猛虎は、巨象の頭に跳ねあがて爪を立てた——わッと云ふ土人の叫びが起つたと思ふと、這は奈何に象使ひの土人は、地上に掻き落された。

危機一髪——猛虎の牙は土人の頭を嚙まうとした時——巨象が千鈞の力を籠めた鼻を振ふよと見れば、猛虎はどつと横さまに跳ね飛された！！

戰鬪は開始された！狙ひ撃ちの銃聲は耳朶を掠めて、煙硝の臭は一面に擴がつた。

僕も夢中に曳金に指を嚙へて前面を睨んだ。

二十一　非常報知の竹法螺

あはや熱帶の一地劃、耳朶を劈く銃聲と、煙哨の臭に包まれた吾輩は、好敵來れッと銃を擬する。

『君！後方の敵を頼む！！僕は前面を警戒する。』

ルード氏は口速に聲張上げて、射手箱の前面に蹲んで眼を配つた。戰陣は刻々に殺氣立つて、猛虎の呻きが怒濤の如く、風を捲いて肉迫する。

僕は前面の敵を讓つて後陣についた。敵の襲來は眞面に見えぬが、其丈餘分に氣が揉める——巨象が躍つたのであらう。搖々と危うく身體が横倒れになつた。呀と驚いて回顧る途端、ポーッと

胸底に答へるやうな竹法螺の音が聞えた。

非常報知だ！

『警戒し給へ、あの通りだッ』

然しルード氏の頰には、勝算が歴々と、微笑さへ浮べてゐた。聲に應じて僕は遠く前方を透してみた。壯觀！十數頭の猛虎は前後して突進して來る！！

『綱を締めろ！』

意外にも礫の如き叫びは投げられた。第三陣の象使が僕等に向つて注意したのだ。扨こそと思つて起上らうとする、脚元危うく射手箱は搖々と傾いだ。はつと思ふ息もつかせず、一頭の猛虎はウオッと云ひさま跳り上つて、巨象の脊に爪を擊込んだ。

『危險いッ』

間一髪――象はどゝつと狂ひ出すと、腹へ廻した綱の緩んだ所爲か射手箱は滑りかけた、猛虎は更に怒號した。

二十二　象を替へて奮鬪

全身の血は湧き返つた。危うく脚を踏しめて身體を支えた射手箱の裡――縋るべき處もないから銃の覘は思ひも寄らない。『此迄だッ』銃口を握つて横なぐりに、矢聲を諸に振廻したが空をきつて手應が莫い。失策つたと思ふ束の間、戰陣の裡に敵を避けた。勇猛なる土人は裸馬を乘り捨てゝ走りつけた。握り太の荒削りの弓を差伸べて、今や射手箱へ爪を立てやうとする猛虎の後脚を骨

も碎けよと撲りつけた。猛虎は不意擊を喰つてどつと落ちた。己れと云はぬ斗りに徒歩立ちの土人を追はうとする。土人は象の腹を潜つて陣中に逃込んだ――猛り狂つた虎は尙飛込まうとする。前面を物馴れた巨象が恐ろしい鼻を振廻して遮ぎる――牙を嚙みながら虎は進む事が出來ぬ。野に千年も經た猛虎と雖も、象の鼻には敵する事が出來ない。誤つて胴體を捲かれゝば最後、地響と共に投げ殺されて了うからである。

虎も其と知つて決して象の鼻面には立たない。必ず側面攻擊をやる。辛くも土人の奇智によつて救はれた僕等は既に戰鬪力を失つた、

『什麼しやう』

『象を替へて戰ふより仕方がない。外側へ降りちゃ危險だ、内側へ〳〵』

ルード氏は傾斜した射手箱を見捨てゝ象の脊を越えて内側へ飛降りた。僕も續いて飛降りた。早速第四番目の象の射手を卸して二人は再び象の脊にのぼつた。戰闘は闌である。巨象は悽ましく十數頭の猛虎を相手に彈丸は急霰の如く浴せかけられる。

二十三　それ今だッ

僕は腰を宙に浮せて、第二の象の脊に戰陣を造つたが、ルード氏が後方の敵に向て續けうちの銃聲を耳にしながら氣のみ急かれて、未だ一發の彈丸さへ見舞兼てゐる。――犀――水牛――大蛇

數へ來れば危機を犯し猛獣に接戰した事は一再ではないが、殆んど今度のやうな猛烈な敵勢に殺倒された事は莫い。十數頭の巨象は、各れも三角形の戰陣を護つて鼻を揮つて敵に當る。

敵の二頭は既に彈を喰つて血を浴びた。

僕は息を吐くひまもなく前面の敵を見張つてゐる。

『それ今だッ、遁すな――ッ』

ルード氏は絶叫した。

僕は奮起して曳金を引いた。

彈丸が迅しか敵の脚が地を離れるのが遲かつたのか？額を掠める哨の消ゆる間もなく、猛虎の叫びは凄まじく起つた。負傷の虎は後脚を縮めてぢつと射手箱を睨んだ。

瞬間――僕は第二發目を射出した。手應へのあつた最初の一發は然まで敵の勢を挫かなかつた、何故と云ふと土人の用ゆる煙哨が手製である上に、總て舊式の銃のみであるから、自然一發の彈丸に敵の生死を別つと云ふ効驗がないのだ。

火蓋を切つた第二の彈丸は肩先へ命中した。占めたッと思ふ間もあらばこそ、身を跳らして、強敵は象の前面から奮進した。

敵は既に狂亂の姿だ。くわッと開いた鬼一口、何者かこの前に立塞がつて爭鬪する勇氣があらう――巨象はとゞッと荒狂ふた。力をこめた鼻を揮つて横なぐりに撲倒した――その倒れる處を乘出して巨脚でウンと虎の頭を蹈みつけた。虎は苦しげな聲を張上げて怒號した。四肢を縮めて剃刀のやうな爪を巨象の脚に擊込んだ藻掻いたが詮方もない、大磐石のビクとも動かぬ。

散々弱らして置いて脚を外すと、虎はよろ〳〵と起上る――途端巨象は更に鼻を伸して胴體をぐる〳〵と捲いた。而して高く持上げて烈風のやうな勢ひで、左方の木の根へやつと云ふほど投つけた最後……有繋の猛虎も一たまりもなく無慘な最後を遂げた。首尾よく當の敵は仕止めた。

第六信

壯快なる高原の虎狩（下）

二十四　新手の豹加はる

爭鬪稍々二時にわたつて、更に一層の悽慘を極めた。狂亂せる敵軍には新手の精兵を加へた——恐るべき虎につゞいて十數頭の豹が加はつたのだ。

非常報知の竹法螺は、銃聲にまぢつて悽まじく響きわたる、徒歩立の後援隊を呼ぶ合圖である。

僕は一頭を仕とめて勇氣百倍、續け彈丸を亂發して巨象の脊から豹軍の勢を挫かうとした。巨象の鼻に撲り飛されるもの、彈丸を喰つて般紅の血を浴びたもの、何れも風を捲いて最後の奮鬪を試みる。虎の眼中には象も人も彈丸もない。恁うなると危險の度は益々加はつて來る。夢中になつて狂ひ廻る虎に象の鼻を向けて防いでゐるうちに、新手の豹は機に乘じて横あひから驀進して

來る——煙哨に掠んだ額は玉の汗が瀧の樣に流れる。此時——再び三度凄じい竹法螺の音が響くと、後方遙にわつと云ふ鬨の聲が起つた。

數頭の猛虎は屹と姿勢を變へて、聲のする方を睨んだが、砂を捲いて飛出した——數十名の勢子は散々に陣を敷いて手に手に石弓棍棒を携へて應戰する。

僕も其等の光景に眼を映す暇もなく、射手箱のなかゝら縱横奮戰に力を盡した。

『陣を開け』

『象を走らせろッ』

危急の叫は息もつかせず突發した。何事か知ら！回顧る途端

殆んど名狀すべからざる悲慘の光景は、十數間の後方に實現せられた。

二十五　猛虎の餌血まぶれの臟腑

戰慄すべき血染の屍體！

滿月の如き石弓を張つて、ばら〳〵と小石を飛ばせつゝ應戰して居た徒步立ちの一人は、無慘や猛虎の毒牙に嚙まれて、振廻さるゝと見れば、血まぶれの臟腑はあふれて焦土に投出された！

かつ〳〵と燒け爛れた熱帶の荒野、猛獸の叫びと、勢子の喊聲とは入亂れて天地を震動する。筆紙に盡しがたい阿修羅場に參加した吾輩は既に野獸と引組むべき意氣が加はつた。今眼前にこの

慘狀をみて一舉猛虎を斃して呉れやうと決心した。

『おい、象をやれ!!!』

と怒鳴ると巨象の首に乘つてゐた象使ひの土人は、右手をあげて耳の下ひた〳〵と叩く。搖々と巨象は方向を變じて驅け出した小山のやうな象がと思はるゝ位凄まじくも迅い。

三角陣形が崩ると彌々戰は混雜した。巨象の鼻を賴んで、內側にかくれてゐた誘き出しの土人は楯を失つた。汗を絞つて首を垂れて慄へて居た裸馬は、ヒーンと悲し氣に嘶いた。

然し到底其等を顧みる餘裕がない。迅くも僕等の乘つた象は、徒步立ちの勢子を救ふべく、血狂つた猛虎の跡を逐うて走つた。

二十六　勢子挾み擊となる

徒歩立ちの勢子は、頗る敏捷に且つ勇敢に奮闘してゐた！味方の一人を嚙み殺された意趣晴しに、風を切つて棍棒を揮かぶつて撲つて懸る。一頭の虎を十數人が取圍んで、飛鳥の働きをするが有繋に虎が怒聲を振絞つて跳りかゝると人雪崩を打つて潮のやうに逃と退く——此時怒れる象はどゝつと驅けつけた。數疋の象の手からは手熟の射手が急霰の如き彈丸を浴せかける——勿論僕も再三再四曳金を引いた。

聊か敵の怯むのに附入つて徒歩隊の棍棒は隙もなく擊込んで行く、勢子の陣が盛返されて活氣ついて來る！と思ひがけない豹の

群が矢庭に疲た虎の後に現はれた。

獰惡な面構え、——くわつと開いた口中には血に飢えた舌の乾きが見える！鋭い毒牙！

挾み擊ちになつて勇敢なる勢子も施すべき策が莫い。

『象を撲て！！』

異口同音に恁う叫びながら、飛鳥の如く走りよつて、今しも應援に驅けつけた象の平首を、棍棒でピュッと云ふほど撲り付けた。巨象は奮然として怒つた！無二無三に荒れ狂ふ。射手箱に縋つた面々は什麼して敵を狙擊する處の騷でない。振落されないやうに要心してゐる許りで暫く銃聲が絶える——戰は全く地上に展かれた。

象は益々狂ひ廻る。

『おい象を靜めろ！』

と怒鳴と同乘のルード氏は眼を瞋して、

『何だ君！今象を靜めれば勢子は塵殺だ』、

と言葉鋭く極つけた。

扨こそ象は最後の有力なる奮闘者であつた。當るに任せて鼻で撲り倒す。踏みつける——巨象と猛虎との爭闘に、勢子と豹とは閉めつ開きつ突喊する！！

僕は搖りかへされる射手箱の裡にゐて、到底銃の用ふ可らざるを知ると同時に、偶と氣のついた日本刀、確と腰に佩いた三尺の秋水は鞘のまゝである。——山腹の露宿に大蛇を斬つた血糊は例へ曇らうとも、未だ猛虎の眞向へ冴た大刀風を浴びせかけるには充分だ。

僕は銃を捨てゝすらりと拔放つた。ルード氏は目ざとく見つけて。

『此方は大丈夫だ、投げて遣り給へ——勢子に——』

と叫んだ。僕は言下に大刀を投げやうとした。

『おーい、刀を遣るぞ！』

發止と投げた秋水は、速やかに屈强な土人の右手に拾はれた。

——刹那！

件の土人の後に覆ひ被さるやうに一頭の豹が跳りかゝつた!!!

二十七　再度の銃戰

僕の携えて來た日本刀は今勇敢なる土人の手に拾はれんとした。間一髪豹は土人に跳りかゝつた——敏捷なる土人は其と知つて身を起さずに地上に倒れながら、笠にかゝつて嚙つかうとする豹の前肢をさつと横に薙いだ、眞に水際立つた離れ業である。有繋の豹も前肢を斬られて身を退いた。虚に附入つて土人はひらりと起上つた。

今迄攻勢をとつた豹は反對に窮地に陷つた——僕等の乘つてゐる巨象は、益々狂ひ出して豹の後面に進んだ。前からは日本刀を振被つてじり〳〵と土人が迫め寄る。退らうとすれば巨象の鼻が

一擊を加へる——多勢の勢子に遠捲きにされた豹は袋の鼠同樣である。勢に乘じて件の土人は衝と身を進めざま、二つになれと斬込んだ電光石火、什麼した事か風を切つて刀身は向ふに飛だ、目釘が折れたのだ。土人の手には柄ばかり殘つた——わつと云つて陣を開く——更に二頭の豹は奮進して來た。

息もつかせぬ混戰に、勢子の眼は血走つて汗はしとゞに流れて油斷のならぬ徒歩の苦鬪が思ひやられる。ポーッと竹法螺の聲が響く——と陣聲は俄かに變つて亦銃戰が開始される。

遁げ遲れた一人の土人は、豹の爪に股をかき裂かれて悲鳴を擧げて倒れる奴を、ルード氏は狙ひ擊の一發を、美ん事豹の腦天に擊込んで土人を救けた。

混戰數刻、遂に虎は後を見せて、舊來た荒野の草を飛んで姿を隱した。

最後の竹法螺が響くと、勢子は一齊に驅集まつて負傷者に手當を加へるやら、獲物を一つ處に引ずつて來るやら大騷ぎだ。

『御苦勞〳〵』

ルード氏を始め射手の面々は徒歩の勢子に向つて切りと慰撫の言葉を述べてゐる。僕も射手箱から降りたが、頭がガーンとして甲でも被つたやうで、白日を掠めて吹く高原の風が喩へやうのない胸苦しさを感ずる。

鉛色をした空の雲が怪異の姿を轉々しながら吹かれて行く。いくらか風脚の忙しいのは聽て雨を催ほすらしい天候だ。

彌々これで宜し、と思ふと氣の所爲か一時に身體が疲れて、眼前土を染た土人の血と野獸の血——とが腥さい戰場のやうに思はれる。

これから手分けをして獲物の始末にかゝるのだ。

勢子の眼には狂喜の光が宿つてゐる。渠等は狩の度毎に、必らず一人か二人の怪我人を豫想してゐるから、今日恁うして無事に狩を終えた喜びと働きに應じて、幾チカルかの名譽の賃金を貰へるのが何より嬉しいのであらう。

二十八　象に獲物を積んで歸る

狩跡の高原は咆哮の聲も絶えて、爛れたやうな空の光がくわつ

と照らしてゐる許りだ。疲れた象、勢子の勢揃ひをして彌々引上げにかゝる。

獲物は虎が十二頭、豹が四頭、各れも血を浴びて斃れてゐる。就中蜂の巣のやうに彈痕を脊負つた豹は、無慘にも鼻柱を撲碎かれてゐる。先刻の勢子は目釘の拔けた刀身を拾つて持つて來た。身輕な勢子は巨象の脊に登つて獲物を曳上げにかゝる。蔓をより合せた丈夫な繩で虎の首玉を縛ると、上の方へぎりぎりと絞る——ぽたり〳〵と滴る鮮血、象の脇腹へ迸と血潮が流れた。

ボーッ〳〵と勝鬨の竹法螺を吹立てゝ歸途についた。悠々たる象はのそりのそりと鼻を振廻しながら歩く。軈て多勢の出迎を受けて、部落に歸りついた頃は、夕日が赤く山の端に流れて、熱

の冷めた日影が疏らにチークの繁葉に映つてゐた。

僕とルード氏とは、村長タームランの家に戻つて、裏の小河で汗を流した。

歸つて來ると庭に曳入た二頭の象（タームランの所有）の周圍に五六人の娘子供が集つて、手に〳〵小桶に入れた白い粉を握つてゐる。

『この粉は何にするのか』

と訊くと

『これは象に塗るのです』

『象の背に？』

『エ、、可愛想に散々虎や豹の爪で引掻かれましたから、痕の跡

に塗つて遣ります、然もないと今度目の狩に働いて呉れませんから』

と妻君が口早に説明した。見てゐると小高い箱を蹈臺にして、白い粉をパッと爪跡の痕に振撒いて、平手でごし〳〵と磨り込んでやる。深く釀した綠の蔭、象の牙のみ際立つて白く、素足の女子供がせつせと象を劬はつてゐる――云ひ知らぬ興味をもつてその光景を見てゐた。

『什麼です、今日の彼奴の働きは――』

とタームランは象を指して會心の笑を浮べてゐる。

『――未だ〳〵あれで充分ぢや莫いんです、この前の狩にや立樹を鼻で引拔いて働いたんです』

『然うだらう、隨分僕も澤山の象を使つてみたが、恁う落付たのは始めてだ――時に勢子の怪我人は什麼工合か知ら』

とルード氏は氣支はし氣に訊いた。これから祝宴の準備に取かかつた。

第七信

祝宴中の椿事

二十九、遙かに聞ゆる蹄の音

虎狩の祝宴は荒筵の上に開かれた。日は何時か影つて、爽やかな宵闇の色が涼しく名殘の熱さを洗ふ――夢みる如き星の瞬き、

薄すらとした月の仄めき――これぱかりは熱帶にゐながら、實に心地よい夕暮である、

部落には風におくられて歡樂の聲が聞こえて來る――狂喜せる勢子の家で、此處と同じく祝宴を開いてゐるのだ。只毒牙に嚙まれ爪に裂かれた勢子の家と云ふ直ぐ眼の先の板小屋には、寂しく灯かげがちらつくばかり――タームランに招かれた勢子の古顏はすらりと車坐になつて、何やら嬉しさうに高笑ひをしてゐる。

嗚呼――この樂しげな酒宴。幸多いラオ酒に舌鼓をうつて他愛もなく寛ろいだ勢子の顏には、血走つた眼は見られない。棍棒石弓をとつて狂ひ廻つた蠻勇な俤はない。

酒が廻るに從つて單調な歌聲がおこる――先刻象に白粉をふりまいてゐたタームランの妻君や、近所の娘子供が一座して、座は段々景氣づいて來る。ルード氏も僕も些なからぬ興味をもつて土人の宴に連なつた。

空は深く潤んで、ラオ酒の醉に囚はれた一座は、今にも倒れさうに涼しい椰子の灯皿を央にさんざめいて居た。

すると遙かに戛々と蹄の音が起つた。ハッと思つてルード氏と顏を見合せたが、勢子は誰あつて夫と氣のついた者もない。

『何でせうね、變事でも起つたのでせう？』

『さあ、兎に角彼方へ行つて見ませう』

と立かける間もあらせず、地も裂けよと駈け來つた蹄の音は、ばら〳〵と樹の間に亂れて接近した。

裸馬に跨つた土人――手にはチークの棍棒を携えて傍目も脇らず飛んで來た。

『何だ!』

とルード氏は氣支はし氣に怒鳴つた。

『大變だッ――早く遁げろッ!』

馬上の土人は氣も狂亂の姿である。不意の警告に驚いた面々は四分五裂に騒ぎ立つた。

『什麼したんだ』

『何でも宜いから早く遁仕度をしろ!!彼の聲が聞えないか、彼の聲が――』

『……』

『――虎が部落に荒れて來たんだ』

『エッ』

と云つたなり酒の醉も何處へやら、泰平樂の腹皷を叩いてゐた勢子は、各れも、ばら〳〵と駈け出して行く。

タームランの形相は凄まじく變つて、つか〳〵と歩みよつて注進に來た裸馬の鬣を掴んだ。

『馬を貸せ!』

と屹と云放つた。土人は云はるゝ儘にひらりと馬から降りた。

『おい、早く仕度をしろ』

狼狽てゐる妻君に向つて叱る樣に恁う云つた。

三十　馬上の女

僕は度膽を抜かれて、暫らく烏呂〳〵してゐた。四圍に人影の些くなつたのに氣がつくと、急に自身の不安を感じた。

ルード氏は白蒼な顏をあげて、タームランの傍へ走り寄つて、むづと肩先を引掴んだ。

『お前迄が、そんな醜態は何だ！早く勢子を集めて銃の用意だ！！勢一ぱい怒鳴りつけると、タームランは驚掴みにされた肩先をぐいと振解いて、捻ぢ向きさま、

『駄目です、今時分！彈藥が盡きた上に、あの疲れた勢子や象を集めて、夜中に狩が出來るものか』

と語氣荒く拒絶した。

萬事休焉！彈藥が盡きれば仕方がない、遁るより外はない。ルード氏は兩腕を組んで樹に倚りかゝつて前方を睨んだ。猛虎夜襲の咆哮を聞かうとしてゐるらしい。

タームランは一切そんな事にはお構ひなしで妻君を呼び立てる狂氣の如く家のなかを走り廻つて居た妻君は

『待て〳〵下さい、今……今直に……』

と泣き出さん斗りにおど〳〵してゐたが、左手に五つ斗りの子供を引抱へて夫の傍に走つて來た。

『この馬を飛ばせて例のクラーナへ行つて待つてろ』

とタームランは命令した。

妻君はひらりと鞍に跨つて裸馬に飛乘つた。タームランは兩手で高く子供を捧げて渡す、とそれを小脇に抱えこんでどつと馬を煽つた。

夜更けの杜に星はさや〳〵と顫れてゐる。奔馬は蹄をあげ砂塵を捲いて疾驅した。タームランの姿も何時か闇に紛れて莫い。

『君、避難しやう』

と僕はルード氏を促した。

『チョッ、忌々しいな』

と捨鉢な言葉を殘して、ルード氏は樹蔭を離れて、足に任せて村盡れへ走つて行くと、緩い傾斜に幾十人の人影が急ぐ樣が夜霧にぼんやり隱見する。村中の老若男女は、一齊に小山の麓を目蒐て避難する。

僕等も殆んど夢中に走つた。

避難場所のクラーナと云ふのは、深林の木の根を楯に作つた石室で、入口は漸やく人間の身體が横に通る位、そして幾曲折してゐるから容易に猛獸が跳りかゝる事は出來ない、――若し無理に猛獸が押入れば首だけ先へ曲げて入らねばならぬ其機を利用して巖石を落して殺す――と云ふ構造である。

僕は四人の土人の仲間入をして偶あるクラーナに隱れた。

『先づ一安心』と掌で額の汗を拭くと、部落の方向に當つて悽まじい猛虎の咆哮する聲が聞えた。

土人はひつそりと靜まり返つて、眼ばかりきよろ〳〵光らせて

ゐる。

三十一　悽慘なる一夜

クラーナの濕つぽい夜氣に濡れつゝ土人は恐怖の念に顫えてゐる。ルード氏も僕も息をこらして遙かに聞ゆる猛虎の咆哮に耳を濟ませた。刻一刻、霧の流れは益々濃く、夜の闇は徒らに樹立の深みに月の光を宿してゐる。誰か知らず、いゝ〳〵と僕の臂を掴んで曳張るものがある。

『何だ！』

と訊くとルード氏の聲で、囁やく樣に

『僕は飛んだ失策をした。君例の獲物は小舍に藏つて置かなかつたね』

と殘念さうに問ひかける。事實然うであつたかも知れない。僕も咄嗟の出來事に確とは記憶せんが、酒宴の筵に坐つた時に、何でも腥い血染の儘で、庭隅に積み重ねてあつたやうに覺えてゐる。

『若しや、藏つて莫いとすれば折角の骨折も水泡に歸して了ふ』

と屢々ルード氏は舌打をして口惜しがる。兎角するうちに闇を劈く猛虎の怒號は凄まじく繼續をして更けゆく夜天は軈て俄かに猛雨をさへ齎らして來た。

『家の象奴苦しめられて居るだらうに……』

と忙しげな溜息を吐く聲につゞいて

『象なら宜いが、掛替の莫い娘を忘れて來た』

と涙を啜る土人もある。恁うして氣が氣でない一夜を明して、扨て歸つて見て部落の荒狀は甚麽であらう――身の毛も慄立つクラーナに、夜すがら狂獸襲來の騷擾を思ひながら、まんじりともせず顏と顏を見合せてゐた。

曉近く猛虎の聲も絶えて、仄々明けに雨の脚も和らいだ。ほつと安心の胸を撫でゝクラーナを出た老若男女は、怖る〳〵傾斜を辿つて各自の小舍へ歸つて行く――

僕もルード氏も默つてクラーナを出た。血の氣の失せた横顏を見せたルード氏は、最早僕等を相手にもしない。さつさと懸命にタームランの家を指して急ぐ。辛と追つけて見ると、這は奈何に

踏荒された樹立の蔭、雨に濡れた荒筵の邊にずーつと血痕が流れて、一頭の獲物の跡方も莫い。

生死を賭して奮鬪して捷ち得た虎豹の屍體は、夜襲せる猛虎の爲に嚙へ去られて了つたのだ。

ルード氏の失望！落膽！見るも氣の毒な程蒼ざめて、默つて庭の一隅に突立つてゐる。――聞けば虎に襲はれた部落の象も、些なからず怪我をしたとの事だ――然し這うして居るべきでない。失敗は失敗として一先づ結末をつけねばならない。僕はルード氏を慰めて費用の一部を分擔する事にして勢子の費用を支辨した。

這麽わけで壯烈を極めた虎狩は、一先づ段落を告げた。猛獸狩を職としてゐるルード氏の失敗は云ふ迄もないが、僕も飛んだ側

杖を喰つて、費用の一部を支辨しなければならぬ破目に陷つた。

象一頭の賃金は卅チカル、勢子の頭割りに三チカル宛を支拂はねばならぬので、ルード氏は些なからぬ損失を被つたが、僕も無なしの財布を逆さにして提供した。然し彼程壯絶な虎狩の費用として支辨するには、決して惜しいと云ふやうな妄念は動かなかつた、僕は飽迄も危險を犯して、猛獸狩の壯快なる通信を本社に送り得れば望は達する。多少なりとも讀者の感興に値すれば足れり矣であるが、可惜獲物をむざ〳〵と奪ひ去られたルード氏の身にとつては、近年にない大痛事であつたに相違ない、然し再び捲土重來の勢を盛返して、復讐の首途をするには、殘念ながら資本が續かなかつた。

其日の午後、ルード氏も僕も恨多き部落を後に出發した。氏は一度諾威へ引揚げて、更にこの地方へ出直して來ると揚言してゐた。——僕は例によつて、卷蒲團疊み蚊帳なぞの類を一纏めにして、思出多き日本刀を杖ついてルード氏に別れ、部落を越え流れを渉つて熱帶地上の一旅客となつた。

第八信

ナイルド大僧正と語る

三十二 繪の樣な河瀨の眺望

沛然たる猛雨は隈もなく空を閉ぢて樹梢に騷ぐ。僕は舊來た途

を辿つて邏羅本國へ志した。路上の辛慘は云ふまでも莫く、或る日暮方にポーサー村と云ふ、部落の長の家に辿りついた。家族は何れも欣んで誠意を盡して歡迎して呉れた。其夜夕涼の世間話の序に、日本の宗教に就ての話説を洩らすと、主人は切りに欣んで是非寺の和尚に逢つて呉れろと、前にも增して懇ろな待遇振である、此家の主人始め家族は熱心な佛徒で、夜の明けるのを待つて、主人と共に山の手を指して出發した。

見遙す立樹つゞきに、斧を入れぬ深林は暗く繁つて、名も知らぬ幽禽が切りと哀れな音を鳴いてゐる。

寺までは約卅丁ばかりの坂路で、水の聲、風の響が、快よく綠を洩れて空は晴れた。聽て踏が木蔭に這入ると、帶のやうな清い

河瀨にソワの圓葉がびつしりと浮んでゐる。頭の上には僅かに空の碧を見せるばかり、蔓草の眞紅の花、夢のやうな白い蕾が繪のやうに咲きつゞいて、風の吹く儘に刺すやうな、强い薫が搖ら〳〵と搖れかゝる。

間もなく河瀨の上流に出た。村長はいそ〳〵と足を迅めて、偶ある木蔭に姿を匿した。

すーつと水草の圓葉を分けて、水に浮んだ木造りの小舟、船首に木彫りの飾をつけて、巾の狹い突がつた恰度伊太利のコンドラに似た、ルアチャンと云ふ小船である。

『さあお乘りなさい』

と楫をとつてすつと岸に寄せた、僕は云はるゝ儘に密と乘つた

清々しい四圍の景色に靜まり返つた胸の底に、久し振で、おつとりした自然の憧憬を沁々感じた。

三十三　千年以前の名刹

小舟に乘つて岸を離れると、水肌の涼しげな河瀨は、すつと波を逐ふて心地よく緣の蔭を浮べてゐる。幽邃な水境、鳥の音に送られながら、花の薫を浴びて小舟をやる——血に荒んだ胸の扉に得も云はれぬ懷かしさを思はしめた。

小舟はものゝ小半時水聲にそゝのがされて偶ある岸に着いた。

『あれがワツ、トンです』

と指さす方に眼を轉ずると、今迄何の氣もつかなかつた丘陵の

中段に、菩提樹の茂つた並木、きら〳〵と光を浴びた暗緣の葉を靡けて、大伽藍が聳えてゐる。僕は些なからず驚いた。その昔佛徒がこの熱帶に、佛果を說いた事は歷史の上に學んでゐたが、此程壯嚴な、大仕掛なものとは思ひも寄らなかつた——ワツは寺の意、トンが名稱らしい。

村長の語る處によると、この寺は未だアイチアに王城があつた頃開かれた、由緣の深い寺で、千年來の古刹であるとか、現住の大僧正は、ナイルドと云ふ老僧で、兼てサンスクリットの研究と文學上の造詣が深いので、その法德は王者の如く尊敬を拂はれつゝある、大勢力家であるさうな。

僕は好奇の眼を睜つて坂路を登り、寺內に這入ると約一萬坪の

山腹に菩提樹の影暗く、見るからに日脚も鈍い古刹である。

『暫らくお待ちなさい』

と斷はつて村長は怖る〳〵、横手の式臺に進んで案内を乞ふた。

三十四　命がけの坊主の濡事

寂とした伽藍の奥には人聲が淀んでゐる。嬰て奥へ導かれて大僧正と對座した――痩た肌に腰衣を着け、香染七條の袈裟をかけた端然たる風丰――遠來の珍客を迎ふる應接振りの暖かさは、確かに名僧智識たるの貫目がある。僕は逸すべからざる好機を欣んで、年來の希望を述べ、ナイルド老僧正から、親しく地方の宗教界の現狀を聞いたが、頗る奇異に感ずるものが多かつ

た。

その夜は寺に泊めて貰う事にして、夜と〻もに燈火を圍んで語り明した。

我が懐かしき日本でも、近頃まで僧侶の肉食妻帯は、ならぬものと思はれてゐたが、暹羅に於ては更に一層嚴重である。茲に暹羅の僧侶が、奈何に女色を遠ける事の峻嚴であるかに就て、老僧正の口から聞いた、二三の實例を記して置かう。

何も暹羅に限つた事はない。苟も御佛の弟子となつて、頭を圓めた身をもつて、酒色を近づけるのは宜しくない。が日本では其が爲に、命を奪れると云ふ樣な禍をかはないで濟む――が暹羅では僧侶が酒に酔つたり、聽し女と巫山戯でもしたら最後、總ての權

能天賦の自由は、容赦なく剝脱された上に、實證を突つけられて、斬罪に處せられて了う。奈何に天の美祿も花のやうな美人でも、唇を觸れ夢のやうな語ひをしたのみで、大切な首を刎ねられては堪つたものぢや莫い。故に腰衣を纏ふた僧侶は命にかへて酒を忘れ、女を遠ざけて戒律を守つてゐるのだ。

二十五　破戒僧の遠流場

慘酷とも云はゞ云へやう、――然し未開境の佛徒を總べるには恁うした手取早い手段に出でるより外はあるまい。更に々々驚くべき酷刑が行はれてゐる。

假初にも、酒に醉ひ女に惚れるには、首を伸べでかゝらねばならぬ僧侶は、逃と染る唐紅に息の根を留められても、夫れは身から出た錆と諦めも出來やうが、生きながら送らるゝ、地獄の山の苦しい首途を、此上もない家門の恥と心得てゐる。

地獄の山！地獄の山！！とは何處であらう。その昔不老不死の靈藥があると傳へられた、南海の崑崙山へ追ひ遣られるので、女故に酒故に、浦若い身の末永い生涯を、兀山の雨露に朽ち果てゝ了はねばならぬのだ。バンコックから香港へ向ふ途中、右手遙かに物淋しい一帶の連峰が見える。樹も疎らなる兀山こそ、不覺の佛弟子を封じ籠める遠流場であるのだ――目下佛領アンナン及び、カンボチヤ地方よりの、三千餘人の囚人が佗しい餘生を、苦熱の底に送つてゐる――昔は仙人の棲家と仰がれた靈峰も、今は空しく囚人の

遠流場と變つて了つたのだ。

更に驚くべきは國法として、僧侶一般に活動寫眞を見る事を嚴禁してある珍妙な沙汰で、腰衣を纏ふた彼等は、空しく樂の音に耳を押えて、羨ましさを堪へて居なければならない。

何故這麼莫迦々々しい法律が發布されたかと云ふと、或時一人の破戒僧が、活動寫眞の映寫中妄念に嗾かされて、闇を探つて女の手を握つた。驚くまい事かゞヤッと云つて振放す途端に、鮮光迸と明るく浮んだ烏呂々々した僧侶の襟首——其儘曳づり出されて腰衣を剝がれ、遠い〳〵崑崙の峯へ放逐されて了つた。此痴態が動機となつて、僧侶一般活動寫眞の見物を嚴禁されたのである。

這麼風であるから、苟くも僧侶と名のついた人間は、暖かい血

を湧かす事もならぬ。天の美祿の香を嗅ぐ事も出來ない。假令親身の母姉妹でも、女の手から直接に物を受取る事さへ許されてゐない。掌に布を敷いて、其上に受けねば戒法に觸れる——殆んど人間外の待遇を受けてゐる代りに、徵兵除けの金城鐵壁として、愛國心の乏しい壯年は我勝に寺入りをするのであるから、一ケ寺に三百五百の僧侶の居るのは珍らしく莫い。現に此處のワットンにも、四百人からの坊主が讀經三昧に耽つてゐる。此大勢の僧侶が什麼して生活して行くかと云ふと、寺の破損修繕等は國庫から支出される。僧侶は毎朝白々明けに、幾組にも別れて托鉢に出かけるのである。片肌脱ぎに香染の袈裟をかけた僧侶の群が、曉起きの村々を低唱して行くと、篤志者が走り出て米、通貨を捧げる——

その貰ひ溜めが各自の收入で、米は坊で自炊して食ふ、錢は其日其日の小遣に宛てる――と云ふ世話のない生活を營んでゐる。聽て徵兵期限が濟むと、のこ〳〵と還俗して了ふから、凡そ卅歳位の年配者の多くは、必らず一度は僧侶になつた歴史を有して居る。

夜とゝもに語り明した翌日、僕は老僧正の好意を謝し、再び懐かしい河瀬にルアチンを浮べてポーサー村に降り、村長の家に一泊した。

第九信

メナム河畔の鰐狩(上)

閑話休題。飈乎としてポーサー村落を去つた僕は、五日路の炎熱を冒して、メナム河沿岸、僻村を跋渉し、鬱蒼たる椰子、檳榔樹の蔭を辿つて、アークラン地方に到着した。方一里半の綠林に匿れて、約卅戸の小舍には、鰐魚狩を業とせる獰猛なる土人が棲んでゐる――一夜造りの爆竹、蔓草を撚り合せた曳網、機は乾燥期の河岸に熟した。漆の如き暗夜に乘じて、寢込みに鰐を狩つた壯擧。――戰鬪準備の當初より筆を進めて佳境に入らう。

三十六　イチヨロツケイ

僕は屢々アークラン地方へ、鰐皮を買ひにゆくと云ふ支那人に出逢つた。暹羅唯一の交通機關たるメナム河には、多くの鰐魚が棲

んでゐるが、バンコックの市街の流以下には、恐ろしい鰐魚の姿を見る事は些ないが、夫でも時としてはバンコックの市民が、遊泳中牙に嚙まれて、河水に血潮を染める事がある。就中アイチャの上流、アークラン地方の沿岸は、最も鰐魚の多い處で、土人が生死を賭して狩をやるのも此地方が最も多い。僕がアークランの部落へ到着したのは黄昏時で、檳榔樹やバナ、が美しく栽培されてあつた。何でも近くに小舍があらうと逍遙ひ歩くと、果して一軒の小舍があつた。主の土人はナックアンと云ふ老年者で、多年鰐魚を狩り馴れた手練者である。僕が

『セイ、チョロツケー、バイ、ダイ、メイ――鰐狩へ行くか？』

と云ふと

『スー、メマー、メダイ――買手が莫いから行かない』

『チャン、ハイゴン、バイセイ――僕が金をやるから行け』

『バイダイ――宜しい行かう』

此で問題は解決を告げた。僕は小舍のなかに這入つて、旅裝を解くと、引ちがひにナックアンは、明日の手勢を狩出しに出かけて行つた。

同勢は十五人、日當は二チカル宛と約束が出來ると、ナックアンは二三人の土人を連れて、煙硝を取りに出掛けた。鷲かざるを得ない、明日狩をすると云ふのに、今になつて煙硝を造る。――什麼して造るのだと尋ねると、巖窟の濕地へ土を採りに行くのだと云捨てゝ、稍々一時間ばかりして、小桶に白つぽい土を入れて戻つ

て來た。

什麽するのかと思ひながら、僕も煙硝製造の手傳をした。件の砂と云ふのは巖窟の裡の土で、永い間に蝙蝠が死んだり、鳥の糞が貯つたりして、自然に硝石性の藥物が造られる、夫を土臺にして蓬に類した野草を燒いた、輕い灰を加へて、火力の弱い煙硝を製るのだ。

『こんな弱い火藥で鰐魚が撃てるか』

と訊くと

『なあに銃ぢや莫いんです。爆竹を造るのです』

と其儘大急ぎに竹筒に煙硝をつけて、二三十本の爆竹が揃つた彌々先發隊は出發の用意にかゝつた。

三十七　先發隊の斥候

夜は椰子の林に更けて、星の光も雲間を飜れる、先發隊の六人連は、小舍の横手に集まつてがや〳〵と騒いでゐる。——先發隊と云ふのは。鰐魚の子を狩る曳網を張つて置く役目で、夜の闇に潜んで、鰐魚の寢込に戰陣をはるのである——網と云ふのは、蔓草を柔かく叩いて撚り合せ、荒目に編んだ巖丈なもので、土燒の重りがずらりと下つて居る。荷物と云ふと杭が五六本、間に合せの爆竹の外何も無い。

僕はナックアンと連立つて、一足遲くれて小舍を出た。當初ナックアンが先づ手始に子鰐魚を狩ちうと云ふので、その爲めに網を

用意したのだ。夫れは先へ親鰐を狩ると、子が散つて了ふからとの事で、云ふが儘に一切渠等に計畫を任せた。――ぽつ〳〵話しながら眞暗な樹肌の濕りを浴びて林を出拔けると、行く手に當つて、轟々と云ふ水聲が雪崩の如く胸に響く。――メナム河の沿岸に來たのだ。潤んだ空の薄照を透してみると、鬱蒼たる汀の繁は魔神の如く天を摩して、闇を劃る河面の物凄さ、泥を運ぶ河床の唸きが、森閑たる夜氣に響いて悚々と肌を刺す、毒蟲の多い下草を踏んでゆくと彌々流の音が近づいた。

不思議！今の今まで元氣であつたナックアンを始め、素裸の土人が堅く口を噤み、跫音を盜んで、こそ〳〵腰を屈めて歩き始めた。僕も何の理由とも知らず同じやうに踉いて行くと

『御覽なさい、あの水際の突出た横手が鰐の棲家です。今恰度潮が上つて來ますから、この間に網を張つて了はぬと駄目です』

『あの横手の赤土に親鰐は押上つて寢ますが、子鰐は水打際〳〵と寢所を替へますから、其處を附込んで恰度曉方に網の裡にかかる樣に、手迅く張つて置くのです。……爆竹ですか……網を曳くと一緒に火をつけて、親鰐を陸へ逐ひ上げる爲の威です。然もないと屹度人間を逐ひますから、命懸けの荒仕事ですせ』

と耳元に私話く。その隙に二人の斥候は、先發隊の樣子を見屆けに行つた。僕等は漫々たる河水を控えて、闇の隈に蹲踞んで待つた。

間もなく忍びやかな跫音が遠くから入亂れて聞える。――ナッ

クアンはすつくり立上つて、つか〳〵と迎へに行つたが、折返してぼそ〳〵と話し聲が靜かな河岸に傳ふて來る。十人足らずの人影！ 斥候の者と先發隊が戻つて來たのだ。

『潮の加減は？』

『恰度宜い。網は例の處へ張つたが多分三時か……四時が絞り頃だらう……船は出來てるだらうな』

『大丈夫だ！！』

『何しろ久しく狩らない所爲か、鰐奴酷く集つて居るらしい』

『有難い。腕試しだ存分に遣つけろ！』

互に勇氣百倍して夜明の狩を語り合つて居る。暗中の飛躍！ 先發隊は危險を犯して、爆竹を結んだ杭を力に鰐狩網を張つて來たのだ。

海につゞけるメナム河は潮の加減で渚が變る。雨期に河水が氾濫する赤土つゞきの木蔭が、乾燥期に入つて滑らかに干た。其處が鰐の淵である。その恐ろしい淵を圍んで、壯絶なる鰐狩の幕を開ける——刻一刻時の流れに夜の帳が絞られると、囂て叫喚の戰場が發展される！ 待て！！曉の暗い三時を!!!

三十八　好機到來！

再び小舍へ戻つて、板敷の上に横になつてうと〳〵してゐると間もなく僕は搖り起された。好機到來！ 將に午前三時を過ぐる事十五分！ 曉闇の木立を潜つて、彌々鰐の淵に夜襲を試みるのだ。

戰なく心を凝とこらえて、先刻進んだ通りに途を辿ると、夜は益々暗い。――一隊は途中から別れて舟手に廻つた。

僕等の一隊はナックアンに率ゐられて、間もなく鰐棲む突出た河岸の手前まで來た。例によつて二人の斥候は、跫音を盗んで樣子をみに行つた。

『おい導火線は宜いか？』

『出來たッー』

と只二言。寂として報告を待つてゐると歸つて來た。

『恰度宜いぞッ！』

夫れッとばかり腰を浮せて、一歩は一歩より危險なる鰐淵に向つて進む――耳朶に響く河水の唸――息を凝らして闇を探る一團

の人影。

折しも這ふやうにして網の近くまで行き著いた。――嗚呼、今自分のゐる場所から、もの〻數十間と離なれぬ處に、怖るべき鰐の群は、劍の樣な齒牙を嚙んで獲物來れと待構えてゐる――と思ふと、、、、とこそりと誰か身動きをするにも、悚氣を顫つて冷汗がしどろに流れる。

就中、手練なナックアンは、煙哨の導火線を握つて地上に這した、什麼するのだらうと眼を睜つて見詰めて居ると

『未だかッ』

とナックアンは低聲で問ふた。何とも答へるものも莫い。殺氣を含んだ夜風は、河面を嘗めて頭の上の繁木に騷ぐ。

突然――土人はむく〳〵と暗中に蠢めいた。普通事でない！

『見えるぞッ』

とこれも低聲にナックアンの耳元に一人が囁いた。

『宜し!!!』

と云ひ樣ナックアンは腹這ひにずる〳〵と、赤土の河床に這入つて行つた。

偶みると漆を流したやうな、河面の闇を分けてぽつ、ちりと赤い灯――紛れもない船の灯が人魂ほどに見える！！

彼の灯――あのカンテラの灯が高く振回されるを合圖に、鰐狩は開始されるのだ。

刻！一刻！灯影は稍々明るくなつて來る――近づいて來る！！僕

は五體が引締るやうな武者振を感じた。

『準備を仕ろ！』

針のやうに鋭いナックアンの聲が消える――刹那、船の灯は搖ら〳〵と光を掠めた。――と思ふとく〳〵と漆黑の闇に高く合圖の灯は振回された。

『今だッ』

叫びさま起上つたナックアンの手に、火繩がちらと動くと見る間に、電光一閃鮮と走る火勢と共に、天地に轟く爆音が突發した。

喚聲！水陸ともに悽劇の幕は開かれた。――數十本の爆竹は猛烈なる音響と共にメナム河畔の闇を劈いた！

三十九　船方の肉迫

咄嗟の間に修羅場に變つた河畔の騷擾は、到底名狀すべからざる物凄い光景である——導火線の青い火が、稻妻の如く闇を走ると、爆音と共に猛火怪煙は、間斷なく續けさまに闇を劈く。

ナックアンは仁王立に突立つて、身動きもしない。僕も手馴れた渠の爲んやうを見る迄、肩をならべて屹と右手の闇を睨んだ！

此時——十數間前方に當つて喩へやうのない怖ろしい音響——未だ硝煙が濛々と消えもやらぬ瞬間に、凄まじい轟ろきが地軸も裂けよと胸を衝いた。

呀ッと云ひさま二三歩退るとナックアンは

『靜かに……靜かに……』

と手をあげて制した。

爆竹の音に氣を呑まれて茫としてゐた僕は、始めて夫と氣がついた。

親鰐が遁るのだッ

頭から冷水を浴せられるやうな、恐怖の念に嗾かされて、僕は立縮んだ。

灯は河面に染めて高く〳〵振廻はされる——合圖の灯は沿岸の渚ちかく闇を焦がす。殺氣立つた暗中の波間をわけて、船方は子鰐の寢込に肉迫した！

親鰐の遁げる音は益々猛烈になる——幾百疋とも知れぬ猛惡な

熱帶の鰐が、先を爭ふて陸に遁げる！若し白晝眼前にこの光景を目擊したら、甚麼に物凄いであらう。——否勝手知らぬ闇だけに內心の恐怖は一層である。

、、、わーつと云ふ喚聲。船方の灯は三つ四つ五つ巴となつて高く振られた。

『さあ此で宜し！お前達彼方へ行つて網を絞れ！』

ナックアンの語氣は荒い。手に汗握つて待つて居た七人の土人は、箭の樣に河岸を走つた。

『僕も行かうか？』

『否、暫らく待つて下さい。——十分許り——大抵大丈夫と思ひますが、若しか奴等逆押しに襲つて來るかも知れませんから』

鰐の逆襲！僕は二の句が繼げなかつた。只だ二人取殘されてゐる鼻先へ、猛然たる鰐が逆襲したら什麼してこれを防ぐ事が出來やう。僕は氣が氣でない。

『逆押を喰つたら什麼する？』

と念を押した。

『何に他愛はないです。彈丸のかはりに此れに火を點けて、投げればゝ遁げて了ひますよ』

渠は落付拂つて、更に非常に大きな爆竹を取出して、その裡一本を僕に手渡した。ナックアンの握つてゐた火繩は消えた。——三分！五分！戀て恐ろしい地響は林のなかへ遠ざかつた。

『さあ此方は心配ありません。急いで船へ行きませう』

爆竹を放り出してナックアンは先に立つ。僕は待兼たりと許りに一足飛に續いて走つた。

壯觀！奇觀！

わーつ〳〵と船を曳く掛聲が聞える。僕等が河岸傳ひに駈つけた時、薄闇の波に煙る水煙！土人は流に飛込んで船を目蒐けてメナム河を泳いで行く——灯は動く、喚聲は加はる、僕は我を忘れて着古した襯衣を脱いで、ざんぶとばかりに水音高く躍り込んだ

四十　水を裂て躍る怪魚

油を流したやうな、水の重いメナム河の波の轟き——殆んど夢中に躍り込んだ僕は、迸と散る水煙を頭に被つて、曉闇の漫々たる

波に揉まれながら、扳手を切つて泳いだ——息は切る。濁浪の渦を潜つて、辛くも船の灯を間近にみると、頓に勇氣が加はつて何の苦もなく舷に片手をかけた。濡れしほたれてひらりと飛上ると、逸はやく先の土人は曳網の綱に縋つて、わーつ〳〵と懸聲をかけて曳絞る！

兎もすれば覆りさうになる危うい船底に、力足を踏〆て僕も大網に手をかけた!!!

喚聲に滿ちた河水の上流に、稍々仄白く曉の潤みを浸して、ひた〳〵と浪が光る。土人の姿も漸々くつきりと瞭きりしてくる——偶みる濁流を圓く圍んだ曳網の裡に、水を裂て躍る怪獣——怖るべき子鰐は必死の勇を皷して荒れ廻つてゐる。

何時かカンテラの灯は消されて、白々と夜は兩岸の河霧に明けて行く。

普通、網は水から岸へ曳くのが常であるが、これは反對に岸から沖へ曳き絞るのだ。外でもない、若し岸に曳くと、一旦逃げた親鰐の、逆襲に逢ふ憂慮が莫いとも限らぬからである。

三艘の小舟に網縄を縛りつけて、懸命に漕いだ！漕いだ！漕ぎ拔いた!!!

物の一時間ほどは、遲々として水と子鰐を孕んだ網を岸つゞきに十數町曳いた。

『着けろ』

とナックアンが號令すると、小船はくるりと向を替へて、瀾々し

た岸に着けた。息もつかせず土人は先を爭つて水中に躍り込んで上陸した。

太い杭を打込んだ岸に、船がきり〻と縛りつけられると、鰐を手捕りに突進した。一齊に鬨をあげた。土人は手に〳〵チークの棍棒を持つて網のなかへ奮進した——チークの棍棒は渠等が狩に用ゆる唯一の武器である。

僕も手頃の棒を振かざして素裸になつて馳せ加はつた。

恐るべき子鰐の群、未だ人間に向つて危害を加へる丈の勇氣はないが、此處を先途と荒狂ふ猛勢は、形容すべからざる凄まじいものだ。

『只撲つても駄目です。急所を！急所を……恁う撲つのです』

ナックアンは僕の後から聲をかけながらずいと前へ進んだ。

柝柄三尺餘りの肥つた子鰐、むつくと頭を擡あげて脚下へあらはれた!!!

四十一　荒狂ふ子鰐の最後

鋼鐵のやうな巌丈な怪魚の群。子鰐だからとて侮る敵で莫い。

ナックアンはチークの棍棒を大上段に振かぶつて碎けよ!!と擊降した。風を切る手練の手應え——長い頭に角のやうにむつくりと高くなつた間に發止と命中した——眉間を喰つた子鰐は、毒々しい海老茶色の顎に長い眞赤な舌を見せて、水煙のうちに横になつた。

前後左右!縱横に亂打する棒の音、岸近い淺い河瀨に荒狂ふ子鰐の最後!

明けてゆく曙光のもとに展開した壯烈なる爭鬪は、七時近くなつて終つた。

ホン〳〵と掛聲して、此時既に網はすつかり岸に絞り寄せられた。僕は首尾宜い最後と知つて、茫とした眼を睜つて爭鬪後の光景を見まわした。

其でも土人の棍棒に擊殺された子鰐は卅八疋、手捕にしたのが廿一疋の大獲物があつた、活かして捕つた奴は水に飼つて買手の來るのを待つのだ。

今日しも狩のある事を聞知つた近郷の土人等は、此時ぼつ〳〵

子鰐を買ひに來た。一體子鰐は食料として珍重するより外、皮や牙は捌け口が莫いのだ。就中女の子鰐は酷く肥つて非常に味が宜いさうな。

殺して獲つたのが五十チカル、活かしたのが八十チカルに見る見る賣れて了つたので、土人の日當爆竹の價まで支拂つて、百チカル餘りの意外の儲けがあつた。

四十二　女鰐の味噌煮

午前八時——子鰐狩を終つて引上げてから祝宴の用意にかゝつた。

獲物のうちから肉付の宜い一疋を土産にして、女鰐の料理を始め

た、顎下から刀物を當てゝ一文字に切裂くと、毒血が湧くが如くに滾々として流れる。

『此處が一番美味いんですよ』

とナックアンの妻君が怖れ氣もなく、臟腑を掴み出して、脊筋の骨つきに黄色く喰つついてゐる油肉を切り剝いだ。

眞黑な鍋を火にかけて、かん〳〵と乾かした上に、鰐の油を溶かして下等な支那味噌で肉片を煎りつける——ぷーんと芳ばしい香が鼻につく。炊きたての南京米のぱら〳〵飯を手掴みにして、車座になつて鰐狩の猛者——渠等は慣習として狩の後には、必らず刺すやうな辛い酒に、泥酔して蕃歌を唄つて騒ぐ。

僕も多少口馴れたラオ酒に唇を濡らしながら、味噌煮の一片

を頬張つてみた。美味いッ、喩へやうのない美味さに二片三片と摘んだ。惡酒の醉が頬にのぼつて、寢足らぬ前夜の疲れが一時に出た。

『さあ皆な此處で寐やうぜ、亦明日の準備もあるから』

と年寄だけにナックアンは可い頃を見計つて車座を外した。

『其が宜い〳〵』

と醉ひ痴れた土人は、荒筵の上に横になつて、其儘ぐう〳〵と雜魚寢を始めた。亦しても白熱の光が炎々と照りつける、樹立を洩れる日の影は小舍の軒から滑つて、剣々に荒筵の隈にのぼる——其でも土人は平氣で死んだ如くに熟睡してゐる。

僕はナックアンに特別に卅チカルの心づけを與へて、小舍に這

入つて横になつた。

第十信

メナム河畔の鰐狩（下）

四十三　彈丸は什麼する？

うと〳〵と眼覺ると、早くも夕暮近い日の影が葉裏に掠てゐる生欠伸を嚙み殺して、土人は亦もや煙硝の製造に取掛つた——あ煙硝は出來た。が親鰐を狩るには子鰐を狩るやうに爆竹曳網のみで攻めあげるやうな簡單な譯には行かない。——鐵砲隊、火箭

隙の協力を待つて、猛烈なる襲撃を加へなければならない。處が貯蓄心のない土人は、勿論彈丸なぞを用意して置く譯がない。彈丸が莫くて鐵砲が撃てるか？

『おい彈丸は什麼する？』

僕は氣がゝりな問題を解決し樣とした。

『彈丸？直に出來ます——最早鉛が溶けますから』

とナックアンの細君が傍から口を出す。

成程、先刻女鰐の油を煎りつけた眞黑な鍋をかけて、どろ〳〵と鈍色な鉛を湧かしてゐる。かつと赤い火氣にほてつたナックアンの屈强な顔は、年こそ寄つたれ野獸性な血を享けて負けず魂は眉宇の間に刻まれてゐる。

『鉛は出來た！石を持つて來い』

老ナックアンの號令によつて、小舍の庭に彈丸製造は始まつた。土人の妻は、木の葉を拾つて來て、鐵火のやうな鍋緣へ手をかけた。此時早く二三の土人は、火箸のやうな鐵棒を握つて、葉蔭の乾いた庭土へ小溝を掘つた。

とろ〳〵と其小溝へ鉛を流し込む——二筋、三筋鉛が固まるのを待つて引あげて、花鋏のやうな鋏で、鉛の伸棒を小指大に切る恰度日本の一文菓子、黑砂糖の鐵砲玉を製るのと同型だ。見る間に下敷の芭蕉の廣葉に、數十發の切り放しの、不恰好な彈丸がたまると、其を掴み出して圓みをつける。平たい石の上へ鉛の斷片を置いて、上から平たい石で、どろ〳〵と擦り合せて、什麼やら恁う

やら圓みをつけるのだ。

恁うして騷ぎが濟むと、日の暮々に粗末な彈丸が出來上つた。

『鉛の屑を集めてお呉れ』

と土人の妻が音頭取りになつて、七八人の女どもが、小石と鉛の屑を集めて、筵の上に座り込んだ。

火箭を製るのだ！

鏑矢に似て鋭い矢の根に裝置けた爆藥に、くる〳〵と三捲いた導火線――これは土人の火箭隊が、鰐の口中へ擊込んで、舌を燒いて息の根をとめる武器で、非常に危險なかはりに、手練者が火箭をもてば、藥の弱い鐵砲よりは、數倍の効驗がある。

手まめな土人の女どもは、約一時間ばかりに、數十本の火箭を製つた。

武器は揃つた！

『今夜は皆な家へかへらず待つて居て呉れ――一憩みしたら足場こしらへに出かけるんだ』

ナックアンは足留めを命じた。――足場、足場！何でも非常な大仕掛らしく、而もこの一語は釘を打つやうに、土人の胸へ擊込まれた。

危險！土人の顏は見る〳〵、恐怖の色が現はれた。

四十四　闇を犯して足場を造る

俄かに悄氣かへつた土人は、互に顏を見合せて、淋しい眼を見か

はして居る。足場を製らへに行くと云ふ仕事が、其ほど怖ろしいのか、有繋に勇悍な土人も、俺が行かうと名乗り出る者は莫い。

『誰が行くんだ！』

と鋭どい言葉で促したるにナックアンは

『何の態だい。今が始めてと云ふぢやあるまい、行くのが厭なら俺が出掛ける』

と悽まじく腹を立てゝ起あがつた。然し渠等も人間の皮を被つてゐてみれば、眞逆に老人を一人でやる譯にもならぬ。ナックアンの妻は其場を旨く仲裁した。彌々最も屈强な六人が、危險を犯して足場を製りに出掛ける事になつてけりはついた。

危險——確かに危險には違ない。子鰐を狩られて俄かに荒んだ

親鰐の齒牙は、血を欲して乾きゝつてゐる——その怖るべき鰐の淵に踏込んで、草を刈り、道を開き、更に杭を擊込み、繩を張つて足場を製らねば莫らぬ、確かに難事である。

萬一、杭を擊つ石の響、が黄昏の樹林に谺して、親鰐の群に達したら最後！猛然として鰐軍は殺到襲來する。その萬一の慘狀を胸に疊んで、日暮方から危險の域を犯して進むのだ。

『僕も一緒に行かう』

突如として好奇心に煽られた僕は、その冒險隊に加はつて、足場こしらへに同道しやうとした。ナックアンを始め一座の土人は、各れも驚きの眼を睜つた。

日は暮れた。六名の土人と連立つて、小舍を出ると、途とてはな

い林間の雜草に、冷たい夜の精が動いてゐる。默々として進んでゆくと、今朝子鰐を狩つた處から、五六町右手へ折れて、赤土つゞきの沿岸にずぶり〳〵と脚が埋る、跫音を盜んで歩いてさへ此樣だから、鐵砲火箭を構へて奮鬪するには、到底足場を造らへて掛らねば駄目だ。第一に足をとられて了ふ、脛まで泥に埋まつて了ふ、土人は手に手に刄物を閃めかして、ざくり〳〵と雜草を薙ぎ倒す、その跡へ抱えて來た二尺許りの杭を擊ち込む。

コツーリと石を打降して打こむと、果せる哉闇の深みに谺する、はつと思ふと

『おい、石で打つのは止めろ』

と一人が押とゞめて、刄物で土を掘つて、杭を差して足の先に力

をこめてうんと踏込む——恁うして途を開いた跡へ、打込んだ杭と杭とに、蜘蛛手なりに荒縄をかゞる。その上へ薙ぎ倒した草を敷いて、一歩〳〵と逃げ路を開いてゆく——

『何の事もないが、何故怖いのか！』と聲をかけると

『此からです、遂鼻の先に鰐が寢てゐるんですから』

と怪しく眼を光らせる——その言葉の終るか終らぬかに、怖ろしい物音は前方の闇中に起つた！！

四十五　猿？人？

闇中の怪しき響！

土人は電氣に感じた如く、ひたりと地上に突伏した。僕も夢中に

樹の根に縋つて、薙ぎ捨てた冷たい草の上に横になつた。確に親鰐が騷いだのだ――息をころして五六分過した。と凄まじい音は漸次稀になつて、聽て寂たる靜けさに歸つた。

『あゝ、助かつた』

と呟やきながら、むく〳〵と頭を擡げた一人が先になつて、舊來た途へ四這ひになつて引歸した。只歩いてさへ脚の埋まる濕地――四這ひになつて行く辛さつたらない。鼻を摘まれても判らぬ葉かげの闇に、眼と云はず口と云はず、雜草の尖つた葉が痛く刺す。手の甲はずぶり〳〵と泥に埋まる。辛々の思ひで危險地域を遁れると、暫ばし空の薄光りに人影が其と知られる

『先づあれで宜しとして、此れから布印を結へなけりやならない

が、什麼せこの闇ぢや仕樣が莫い、兎に角小舍へ歸つてみやう』

と相談が一決して、先づナックアンの小舍へ、引上げることにした。

『布印つて何だ？』

と訊くと

『あれは鰐に逐はれて遁げ切れない時、登る樹に目印の布を結へて置くのですが、何しろ大きな立樹ばかりですから、目印がないと面喰つて了ひます……若し旨く樹へ登つても、鰐奴は幾日でも下にがん張つて居ますから、枝移りに飛べるやうな、並木を選つて置かなければ、干乾になつて了ひますから……』

はゝあ讀めた――この話を聞くにつけても、未明の苦鬪が思ひ

やられる。其處で目印の布は、結ばずに一工夫する事にして、深い森を潜り抜けた。回顧すると魔神のやうに、聳り立つた熱帶の深林。あの梢傳ひに人？猿？土人は身輕に飛び歩くのだ。

小舍に戻ると、ナックアンは何與と血眼になつて指圖して居る僕が泥まみれになつて戻つたのを見て、土人の妻は甲斐々々しく水なぞ汲んで呉れる。

『怪我が莫くつて何よりでした』

とナックアンは安堵したらしく僕を迎へて、土人を集めて足場がゝりの模樣を、詳細に聞きとつて居る。

『鰐奴うんゝと集まつて居る？』

『確かに居る樣子でした』

『然うか！一番船を出して攻め場所を探つて來やう、其れまでは用なしだ、些し元氣をつけるが宜いぜ』

とナックアンは意氣冲天！健全〳〵しい妻は氣を利かせて、多勢のなかへ、ラオ酒を出してやる。飲む唄ふ。暫らく、歡樂の酒の筵に火血の油が燃々と鳴つて、夜更けを待つ暫らくを、土人は亦もや手枕にごろりと寢た。

然し老ナックアンは却々寢る處でない。これから時を待つて河つゝきに舟をやつて、狩場を定める大任を背負つて居る。

僕も寢ずにナックアンと手配りの相談をした。

四十六　部署各々定まる

彌々時刻到來して、ナックアンは心利いた二人の土人と共に家を出た。即ち狩場を覗きに行くので、其の模樣によつて、射手隊火箭隊の部署を定めてかゝるのだ。重要な任務！この鰐狩にとつては、此程重要な任務はないのだ。メナム河の重い流れが、油を湛へたやうに眠るところ、水音を盗んでルアチャンを怖ろしい鰐の淵に寄せる。この報告によつて、初めて攻擊隊に活氣を呈するのだ。

ナックアンは約二時間ほど經つて戻つて來た。

『什麼でした？』

と訊くと譯も無く勇み立つて

『何しろ今夜は酷い闇で、透してみても宜く見當もつきませんが、第一區——あの樹の茂つた蔭の白洲には、女鰐が澤山居るやうですから、ちよつと手が出せません。先づ二區と三區を狩らうと思ひますが、二區の方は迂かりすると、一區の女鰐に逆襲はれるから、手馴れたものでなければ危險です』

『僕は？』

『然う……三區の方へお廻りなさい、鐵砲隊が危險が些ないですから』

僕は彌々第三區攻擊の、鐵砲隊に加はる事となつた。

頃は宜し！機は熟した！

『さあ起きろッ』

と聲をかけて寢てゐる土人を呼起した。而してお前は火箭、お前は鐵砲と、一々命令して、彌々勢揃ひが出來た。

夜は深更も過ぎて、午前三時半となつた。

暗中の飛躍！ぐすつり寢込んで英氣を養つた土人は、火箭鐵砲を手に〳〵持つて、鳴をひそめて出發の合圖を待つてゐる。闇を焦すカンテラの灯の搖らぎ！

小舍を離れて闇を探る面々、樹立を潛り雜草を分けて、段々戰線に接近する——

聽て卅分も歩いたとおぼしき頃ほひ、幾度か怖しく胸を刺したメナム河の水聲、何となく息の機むやうな、氣味惡さに嗾のかされて、一歩は一歩より猛鰐の淵に近づくや——さあ恁うして銃先の見えるまで、夜明を待たねばならぬのだ。

僕は默々として土人の一隊に從つて、導かるゝ儘に泥濘を辿つて行つた。

『此處で待ちませう。間もなく明るくなりますから、其をしほに、遣つける事にしませう』

と銃を措いて草の上に、どつかりと蹲坐をかいた。

空漠たる熱帶の空の光は、木の間の闇に掠められて、四邊を罩むる寂寞の精のみ、心なく肌を吹く——

待つ程もなく幾らか闇が淡く動いて、薄紙を剝ぐやうに夜の隈から、明るい光が浮びそめた。

突如！

ピーッと云ふ笛の音が、前方の闇から起つた。笛だ〳〵若葦の葉を、唇にあてゝ裂帛の二聲三聲！

合圖の笛だ！

夫ッと云ひさま、僕は夢中に銃をとつて突立上つた！

四十七　一命は風前の燈

折柄夜は霧の流れに白んで、トンマルクやアラコーの樹立に風が騒ぐ。再び三度響き渡る若葦の笛に、開けた戰陣の幕明きにどーんと轟く銃聲！其と同時に鰐の群は猛然として蹶起した。

鐵砲隊がヤンマイの樹を楯にとつて、一齊に浴せかけた彈丸の雨。第二區から斜に襲つた狙ひ撃の爆音と、谺返しに僕等の一際―第二區を受もつた土人は發砲した。

迸と銃口を飛ぶ火炎！煙硝がぱッと立つと、最早すつかり氣が

立つて、土人の兩眼は野獸の如く輝いた。

發砲――彈藥の煙が消えたか消えぬに、怖ろしき光景は展開された！

何？この場合到底具體的に說明する餘裕が莫い。只最早筆紙に盡しがたき怒れる鰐の形相と答へるのみ、……其も三疋五疋の小數なら知らず、幾十疋とも知れぬ猛惡な鰐が、巖のやうに丈餘の體を蜻蛉返しに泥土を刎ねて、雜木の細木に當るに任せて、へし折ながら殺倒して來た。

眼も眩むやうな物凄い光景！（怎うして通信の筆をとつて、當事の事を考へると他事の樣に思はれる、什麼しても彼の瞬間の怖ろしい心中を抽ない筆に盡す事の出來ぬのは、遺憾千萬である）